

玉虫厨子制作年代考(三)

——建築的意匠より見た玉虫厨子の様式年代について——

上 原 和

一、玉虫厨子の建築様式年代に関する 従来の考え方について

周知のように、玉虫厨子の様式年代に関しては、この厨子の、一見法隆寺金堂の雛型を思わせるような、宮殿様仏龕の建築的意匠より推して、ひさしく推古朝乃至はそれ以前の制作と考えられてきた。即ち、次にみる、田中豊蔵、伊東忠太郎博士の説は、夫々そうした旧来の玉虫厨子様式觀の、主なる発想形式を示すものといえよう。

まづ田中博士は、次のように述べていられる。(註一)。

「さて玉虫厨子の形製は何人も知るが如く、厨子の本体は宮殿——飛鳥時代仏寺の金堂——の形をなし、之を承くるに高き方形の台座を以てす。かくの如きものが奈良朝以前の豪富なる仏教信者によって営まれたりし仏龕の一般の形式なり

しことは、同じく法隆寺金堂に安置せらるる、『橋夫人念持』と伝へられたる厨子と併せ考へて知り得べし。而かも玉虫厨子は橋夫人厨子よりも更に時代古く、其宮殿はよく飛鳥時代仏寺金堂の古形を伝へ、其台座は又法隆寺金堂薬師並に釈迦三尊の台座と全く様式を同くし、その濶を減じてその高を増したる如き形のものなり、単に是れだけにても直に此厨子が飛鳥美術圏内に入り得るものたることは明白なり。」

かくして同博士は、さらに、次のように断案なされている(註二)。

「是れが形製並に様式より觀て、そが日本美術史に謂ふ所の飛鳥時代の製作に屬し、随て古今目録抄の如く、汎く推古天皇時代のものと見ても可なることには何人も異論なかるべし。唯だ余は冒頭に提唱せし如く、特に此厨子を以て我邦仏教遺物中最古のものにして、若し言ひ得べくば、推古朝より

も更に上るものに非ずやと考へんと欲するなり。」

文中、古今目録抄とあるのは、いうまでもなく、鎌倉中期法隆寺寺僧顯真によって記録された、聖德太子伝私記亦名古今目録抄を指すものであり、顯真はそのなかで、玉虫厨子をして「推古天皇御厨子也」と目している(註三)。田中博士はこの古今目録抄を「鎌倉中期の本寺の記録として最も有力なる資料を提供する」(註四)ものとして、この顯真の説を自説に援用していられる。玉虫厨子の古様性に信をおかれる博士は、さらにその制作者にまで言及している(註五)。

「余は玉虫厨子をかく古くと観るが故に、我邦当代の文化の程度にては、到底是程高級の作品を生み能はざるべきを察し、其製作の地は暫く我邦にありとするも、直接に刀斧を執り丹青を揮ひしは、恐く韓、若くは所謂『吳』の地より來歸せし外国工匠なりしならんかと想像す。此事は、他方、厨子面に画かれたる天王、菩薩、天人等が、其形式の古きに拘らず、頗る優麗なる姿態をなし、当時の我邦の造像を代表せし彼止利師一流の佞屈なるものとは撰を異にして、寧ろ一層進化したる芸術境を示せることを以ても推知せらるべし。」

思うに、田中博士の玉虫厨子に関する様式年代観は、主として対象に対する直観的洞察に発しているものであり、尚古的な審美家としての眼に拠るものであったといえよう。玉虫厨子を古しとする博士の様式論が、厨子の建築的意匠よりも彩画において多くなされてくるのもそのためである。玉虫厨子の制作年代が、はたして推古期乃至はそれ以前であるか否

かは、しばらく措くとして、玉虫厨子を古様なりと目してあやしまなかつたこれまでの玉虫厨子飛鳥説発想の根底には、古きものを佳しとする、佳きものを古しとする憧憬的なおもいが無意識のうちにもひそんでいなかったとはいえないであろう。同じように、玉虫厨子船載説への発想もまた、このような一種の憧憬的感情の論理の上に胚胎したものと考えられる場合が多いのであり、事実これまでの玉虫厨子船載説には、そこに納得のゆく実証の論理を見つけることは、きわめて困難であった。この問題に関しては、すでに述べているので(註六)、いまは触れないでおく。要するに、ここでは田中博士の玉虫厨子様式年代観が、なによりもその多くを審美家 Aesthet としての眼と感情に負うていたことを述べておきたいのである。

なお、玉虫厨子の制作年代を推古期乃至はそれ以前とみる博士の直観的洞察が、はたして正鵠を射ているか否かについては、いまここでは問題でない。むしろ私は、これまで飛鳥乃至は推古美術と呼ばれてきている年代未詳の多くの作品のなかには、厳密な意味での様式史的検討の非情さに堪えてきたというよりは、単に観者の感情的要素に委ねられて、漠然と年代を獲ているものも、決して少くないことを併せて指適しておきたいと思う。

田中博士の玉虫厨子に関する様式年代観が、より多く審美家としての直観的洞察に負うているものとすれば、次に述べられる伊東忠太博士の様式年代観は、その基礎を、建築学者とし

ての、より即物的な検証においているといつて差支えないであらう。しかし、この即物家として眼は、様式の論理に対して、かならずしも厳密とはいえないなかつたようである。即ち(註七)。

「玉虫厨子の宮殿が、当時の建築の模型として見られるべき性質のものであることは何人も首肯するところである。そしてその形式が法隆寺の堂宇と殆んど全く相均しい点から見て、堂宇と厨子とは全然時代が同じものであることを知るのである。(傍点筆者)つまり堂宇が推古天皇の御宇に成つたものであるならば、厨子もまた同天皇の御宇に成つたものである点から見て、この厨子は推古天皇の御物であるとする伝記は、正に的中してゐると判断しなければならぬのである。」かくして、伊東博士は、次のように結論している。

「私は法隆寺の堂塔が聖徳太子の考案によつて成つたと見るのであるから、当然玉虫厨子もまた太子の指揮の下に我國において製作されたと思なければならぬ。」

伊東博士のこの結論については、いま問題ではない。現法隆寺の推古創建をそのまま信じてやまなかつた非再建論者としての当然の帰結といふからである。この伊東説が、その後、法隆寺非再建論者に致命的な打撃を与えることになつた、若草伽藍址発掘以前(註七)になされたものであることは、いまさら断るまでもない。あえてここに伊東博士の様式年代観を引用する所以は、これまで即物的な立場に依拠して

きたはずの非再建論者たちは、若草伽藍址発掘以降は実証的にも文献派の主張する天智天皇九年における法隆寺焼失説を認めざるをえなくなつたにも拘らず、相変らず建築様式論者のなかには、現在の再建法隆寺の建築様式を、依然として飛鳥様式と目するものも決して少くないからである。即ち、法隆寺建築に対する様式観乃至は飛鳥様式に関する年代観については、現在といえども、伊東博士のそれとは、本質的なところでは相違を認めえないということを、そして、上代建築史観の成立をさまたげている根本的な問題が、すでに、ここに胚胎していたのだということを、次にはつきり指適しておきたいのである。

伊東博士の所論中、玉虫厨子の宮殿をして、飛鳥時代の仏寺建築の形を模したものと考える点は、前述の田中博士と同様であるが、即物的な立場から、玉虫厨子をして「その形式が法隆寺の堂宇と殆んど全く相均しい」とする点、かくして法隆寺の「堂宇と厨子とは全然時代が同じものである」とみる点、こうした具体的断案は様式論以前ともいうべき田中博士の玉虫厨子飛鳥説にはみられなかつたものである。実物に即して論をなすものの強さといえよう。かつて、法隆寺再建非再建論争においてみられた非再建論者の、建築様式論を踏まえた不退転の気魄も、この即物的立場からくる自信であつた。玉虫厨子の建築様式乃至は様式年代に関する伊東博士のこの二つの断案は、今日に至るも、殆んど疑義をもたれていないように思われる。即ち、

(1) 玉虫厨子の建築的意匠は、様式的には法隆寺系建築に属する。

(2) 故に、玉虫厨子の様式年代は、法隆寺系建築のそれに等しい。

これが、現在、玉虫厨子の建築様式乃至はその様式年代に關してなされている、一般の通説といつて差支えないであらう。わけでも玉虫厨子が法隆寺系建築に属するという見方は今日においても殆んど動かぬところである。しかし、はたして玉虫厨子の建築的意匠は、法隆寺系建築様式に属すると目して差支えないのであろうか。私は疑念なしとしないのである。なおここで私が、従来慣用されてきた飛鳥建築という呼称を排し、あえて法隆寺系建築と呼ぶ所以は、現法隆寺の天智九年焼失を認める以上、即ち法隆寺再建論の立場に立つ以上、現法隆寺の遺構を飛鳥建築と呼ぶことは勿論出来ないからであり、また再建は認めざるをえないが、その様式は依然として飛鳥様式を伝えたものであるという曖昧な逃口上も認めることは出来ないからである。現法隆寺は白鳳の遺構、しかし様式は飛鳥という折衷的な考え方も、一般の通説のように見うけられるが、これは、法隆寺遺構は、様式上飛鳥建築であるが故に、推古創建その儘の建物であると主張してきたからである。様式研究に抛る立場が、とくに建築においていえることであるが、なまじ即物的であるだけに、とかくその過信におち入りやすいように思われる。私は現法隆寺の遺構

が、飛鳥時代の擬古作であるという考え方には賛成し難い。推古創建の、いわば真正の飛鳥建築ともいふべき、飛鳥寺や四天王寺、或いは旧法隆寺などの諸寺が、現在の法隆寺系建築と同じ様式であつたと信じるわけにはいかないのである。

例えば福山敏男博士は最近の論著のなかで（註九）、
「飛鳥時代の様式を今日に残す建築は、法隆寺の金堂・五重塔・中門・回廊と法起寺の三重塔だけであり、ほかに一九四四年（昭和十九）に雷火で焼失した法輪寺の三重塔も資料となるであらうし、法隆寺の玉虫厨子も建築的細部をもつために重要な参考品となっている。」

と述べ、現法隆寺の建築様式をはっきり飛鳥時代の様式と目しておられるが、私はその断定には疑義を抱かざるをえないのである。もつとも博士は、法隆寺の再建を白鳳時代にまで下げることに賛同してられない（註一〇）。即ち、

「その火災の時を日本書紀によつて、六七〇年（天智九）とするのも一つの見解であるが、史料的にもなお不安がある様式史上の観点に立てば天智九年焼失説にはかなりの困難があり、おそらく七世紀の半ごろに今の金堂が造られ、かなりおかれて塔が出来たとみてよいように考えられる。」

と述べられているが、この博士の説によれば、再建金堂の造営は、罹災年代とされている天智九年を超えて、孝徳朝前後にまで遡ることになる。即ち現法隆寺の金堂は、飛鳥末期の再建と博士はみていられることになる。すると博士は、法隆寺罹災年代として皇極天皇二年（643）説を支持なさつていら

れるのであろうか(註一一)。もしそうであれば、その点に關しても疑義が深まるのである。また福山博士は、さらに法輪寺三重塔や法起寺三重塔については、ともに白鳳時代の造営になるものであり、ともに法隆寺にみる飛鳥様式を保持するものと見做していられる。すると法輪寺、法起寺の両塔は、法隆寺金堂の再建より、約四五十年ほど遅れて構立された、飛鳥建築の擬古様式ということになる。この年代の開きも、私には納得できないのである。要するに、これまで所謂飛鳥(或いは推古)時代の様式と見做されてきた諸遺構は、決して、飛鳥建築乃至は飛鳥様式と呼称されてきた諸遺構は、決しないということ、まづ私は断っておきたいのである。すでに、村田治郎博士が早くから呼称されているように(註一二)、飛鳥に代るに法隆寺系をもって称すべきものと提唱したいのである。

さて、ここで問題を再び前にかえし、玉虫厨子と法隆寺系建築との關係について考えてゆきたい。すでに述べたように、玉虫厨子が法隆寺系建築に属しているという見方が、今日一般の通説であり、従って、玉虫厨子の様式年代は、法隆寺系建築の様式年代に等しいという論理的帰結が、当然生れてくるはずである。しかし事實はかならずしもそうではなかった。再建の法隆寺が白鳳時代の建築である以上、玉虫厨子の様式年代も、当然白鳳におかれて然るべきであるが、それにも拘らず、矛盾して、今日なお玉虫厨子に与えられている年代は、他の年代未詳の飛鳥美術と称せられてきた他の多く

の作品がそうであったように、一種の希望的観測として、飛鳥(推古)と見做れてきたといっても、かならずしも過言ではないように思われる。

野間清六氏も最近の論著において(註一三)、これまでのこうした様式史觀の曖昧さを鋭く衝いて、飛鳥、白鳳美術の再検討を提唱されている。その緒口として、なによりもまづ、法隆寺建築の様式年代を闡明にしなければならぬと述べ、さらに玉虫厨子との問題にふれていられる(註一四)。私自身、先に指適してきた問題でもあるので、幾分論旨が重複することにもなるが、いとわずに紹介しておきたいと思う。とくに、玉虫厨子の様式に関する箇所は、多くの問題をふくんでいるので、注意を要するところである(註一四)。

「今日では法隆寺が和銅に近い頃に再建されたものであることは、一応認めるところである。それは若草寺の発掘によって立証されるが、また別の遺品研究の上からも推察されることである。したがってこれから論ずることは、法隆寺を再建されたものとの前提から出発する。さて問題は法隆寺の再建を認めながらも、その建築様式を飛鳥様式と認めている矛盾である。今日までの建築史を見ても、法隆寺は飛鳥様式の代表作となつている。これは今日遺つている建築の中で、法隆寺の金堂・塔・中門の様式が最も古い様式を示していることと、法隆寺は再建されたが古い飛鳥の様式を伝えているという考え方からきている。

しかしそれは今日の遺構だけから見れば、一番古い様式を

示しているのであるが、もし飛鳥時代の諸寺がそのまゝ残っておれば、更に古い様式のものがあったかも知れないのである。また今日では四天王寺や飛鳥寺の伽藍址が発掘され、地上の遺構こそないがその伽藍配置から、更に古い様式が存在したことが認められるようになって来てもいる。次に再建が古い様式を襲うたとする見方も、果して正しいか疑問に思う。その伽藍配置を見れば、四天王寺式の配置から法隆寺式の配置に変わっている。このプランの変更は大胆な根本的な変更であつて、それほど英断を敢えて行つた再建において、様式だけを古いものにしたとは考え難い。またその時代を見れば、大化の改新という大事業を遂行した時であり、革新気分は横溢していたのであるから、再建された法隆寺の建築様式は、その時代にふさわしいものであつたと考えるべきである。それを飛鳥様式と呼ぶのは、大きな誤りではないであらうか。

試みに旧法隆寺であつたという若草寺址から発見されている最も古い瓦の文様を比較して見ると、その形式において、また様式において非常な相違を示している。若草寺の巴瓦は重厚な単弁の蓮花文であり、唐草瓦も剛健なパルメット式唐草であるのに対し、法隆寺のそれは巴瓦の複弁の蓮花文であり、唐草瓦は流麗な飛雲状の忍冬唐草になっており、なるほど七十年に近い時代の隔りを知るのである。瓦の文様の上でこれだけの時代差があるとすれば、建築様式の上には、それに匹敵する新様式の採用があつたことも十分に想像されよ

う。建築の飛鳥様式というものは、もつと古い様式のものである。考えねばならぬのである。しかし建築史では、なお法隆寺が古い飛鳥様式を伝えると主張する。それは玉虫厨子の建築様式と似ているためである。事実その屋根の形や雲肘木の形式などよく似たところがある。しかし二つが似ているからと言って、なにも飛鳥様式である証明にはならぬ。それは玉虫厨子には何も飛鳥時代のものという証拠はないからである。否むしろ玉虫厨子はそれに描かれている絵画の様式の上から、孝徳・天智朝に近いことが推定されるのみならず、再建された法隆寺の建築様式に似ていることによつて、却つて飛鳥の後のものであることが、逆に考えられるのであるから、古い様式の証明にはならない。」

かくして、野間氏は、主として建築史家たちの、これまでの旧説固執の態度を批判しつつ、氏の結論を提示する。

「簡単に言えば、法隆寺を和銅頃の再建と認めるならば、その和銅時代の様式というべきであらう。それを様式のみはあたかも創建当時のまゝのごとく一世紀近くも古い飛鳥様式と思わせているのは、何としても未練がましい態度と言わなければならぬ。あの長かった法隆寺論争も、目的は正しい様式論を確立するためであつたと言える。その論争が終結に近づいているのに、様式論だけが依然として旧説に恋着しているのは、矛盾も大きく、何のための論争であつたかと思う。そうした意味で、私は法隆寺の遺構を、飛鳥時代の遺品から排斥したいと思う。同時に玉虫厨子も飛鳥時代の遺品か

ら脱落せしめることになる。」

こうして、ここに長い引用をさせて戴いたのは、法隆寺建築の様式年代に關しては、旧來の説に對して、私も、野間氏と全く同じ意見と批判をもっているからであり、他方、玉虫厨子の様式年代に關しては、野間氏といささか異つた見解をとっているからである。

玉虫厨子の様式年代に關して、野間氏は、法隆寺の遺構も玉虫厨子とともに、飛鳥時代から脱落せしめたいといわれる。即ち、野間氏のいわれんとするところは、法隆寺、玉虫厨子ともに、その様式年代は白鳳であるということなのである。法隆寺についてはともあれ、玉虫厨子に關してその様式年代を白鳳に繰下げるといふ野間氏の説は、まさに劃期的といわざるをえないのである。これまで、玉虫厨子の様式年代について、その繰下げを提唱なされたのは、上野直昭博士をもつて嚆矢とするが、上野博士の説では（註一五）、飛鳥様式の下限を従來の推古時代より、少しく下げることによつて、玉虫厨子は、飛鳥末期の作風を示すものとして、また飛鳥様式の決算として、なお飛鳥様式の枠内にとどまることをえているのである。飛鳥様式の下限は、必ずしも大化改新に止まらず、さらに延びうるることとなつたのであるが、下限延長の理由は、この場合、厨子に表現されているという千仏の思想なり、押出の技法であつたのである。もつとも、私自身は玉虫厨子の仏龕部内壁を飾る千仏造像を、千仏思想の所産であるとは思つていないので、博士のこの説に異議なしとしな

いが、この問題に關しては、先で述べることになるので、いまは触れないでおく。ともあれ、野間氏のこの玉虫厨子白鳳繰下げ説についてであるが、すでにさきの引用においてもみられるように、玉虫厨子の様式年代が白鳳時代に繰下げられてくる理由は、法隆寺の再建を認める以上、現在の法隆寺諸遺構の様式年代は、当然白鳳でなければならぬ。しかしして玉虫厨子は法隆寺金堂と相似した様式をもっているので、即ち、玉虫厨子は法隆寺系建築に属しているので、玉虫厨子の様式年代もまた、法隆寺金堂の、つまり法隆寺系建築の様式年代である白鳳でなければならぬというのである。これは論理的には正しい。しかし問題は、この論理成立以前にある。即ち、はたして玉虫厨子は、法隆寺金堂と同じ様式と目して差支えないのか、法隆寺系建築に属しているという前提は、はたして正しいのであろうか。今日まで、殆んど疑義を抱かれずに見逃されてきたこの問題に、玉虫厨子の様式年代を解く、いな、日本上代建築史における、これまでの模糊たる部分に解明の緒口をあたえるきっかけがひそんでいるものと考えられるのである。

思うに、玉虫厨子の意匠の建築的細部を、法隆寺系建築と同じ様式的特徴とみるこれまでの様式観は、すでに、田中、伊東両博士の玉虫厨子年代観をとおしてみてきたように、直觀的な審美的立場と即物的な様式史的立場とを問はず、また同じ様式史的立場に拠るにしても、例えば福山、野間両説においてみられたように、法隆寺建築を飛鳥様式とみるか、そ

れ以降の新様式とみるかの如何を問わず、すべて今日まで、その見方は一致していたものといえる。なお、中国建築史との比較によって、最も精緻な上代建築様式論を展開なされた村田治郎博士もまた、「金堂内の天蓋、金堂に近似した点の多い玉虫厨子」(註一六)として、玉虫厨子を法起寺三重塔および今は焼失した法輪寺三重塔とともに、法隆寺系建築の一つとして数えていられる。ここで私は、いまにわかに、玉虫厨子の様式年代が、飛鳥か白鳳かを決めようとは思わない。いま私の関心は、野間氏の玉虫厨子白鳳繰下げ説の発想の根拠が、玉虫厨子は法隆寺系建築に属しているという、日本上代建築史にきわめて根深く定着した様式観におのずから根を下していることにむけられているのである。私には、玉虫厨子と法隆寺金堂が、同じ様式の基盤に立っているとは思われない。その疑義を、これから私もまた、両者を比較しつつ即物的、具体的に論究してゆきたいと思う。玉虫厨子の様式年代を、飛鳥におくか白鳳におくかは、それからのことである。

なお、さきに引用した野間氏の法隆寺の再建年代観について、多少とも疑義があるので述べておきたいと思う。野間氏は、法隆寺の再建年代について「今日では法隆寺が和銅に近い頃に再建されたものであることは、一応認めるところである。」「法隆寺を和銅頃の再建と認めるならば、その和銅時代の様式というべきであろう。」と述べていられる。勿論、ここでいわれている和銅年乃至は和銅年に近い頃の再建という

のは、五重塔・中門などの完成を俟って、一応法隆寺が伽藍としての体裁を回復したという意味での再建と解してよいと思うのであるが、もしそうであれば、そうした意味での再建年代は、法隆寺金堂の再建年代とは、かなりの開きがあることを承知しなければならぬと思う。さらにまたこの法隆寺金堂の再建年代を金堂落慶の年代と考えるならば、その再建年代は、かならずしも法隆寺金堂の建築様式年代と一致するとは考えられない。何故なら、寺院建立の場合の大略の伽藍配置や、個々の建築様式のプランは、多少の例外はあるとしても、普通には造営起工前、少くともその進行中において、すでに決定されているものである。そう考えてくると、或る建物の完成年代をもって、その建物の様式年代をはかることは、かならずしも妥当であるとは思われない。それ故、実際に法隆寺金堂の様式に即して、その年代を推す場合は、その様式年代を、金堂着工前後の年代として考えなければならぬはずである。私は、二、三の理由から、法隆寺金堂の再建年代を、天武朝半ば頃まで遡りうると考え、その時期を天武天皇七、八年前後とみているのである(註一七)、もしそうであれば、法隆寺金堂の着工は、天武朝のはじめ頃となり、その様式年代を目的に、天智朝の後期乃至は天武朝の前期をもってして差支えないように思われるのである。金堂の落慶を天武天皇七、八年と目し、それにより再建金堂の着工をこのように天武朝のはじめと逆算したのは、主として、上宮聖徳法王帝説の裏書に詳述されている山田寺(浄土寺)の建

立記録を参照し、その金堂造営の期間を基準としてのことである(註一八)。いま必要な個所を帝説から引用すると

有本云。誓願造寺。恭敬三尊。十三年辛丑春三月十五日。始淨土寺云云

注云。辛丑年。始平地。癸卯年。立金堂云。戊申。始僧住。

この記録で見ると、まづ舒明天皇一三年(641)に、造寺着工の手はじめとして寺地の整備が行われ、次いで皇極二年(643)に、金堂が建立され、それから五年目の大化四年(648)に、始めて僧の居住をみたということになっている。この「始僧住」をなんと解釈するか問題であるが、金堂の落慶と無関係とは思われない。要するに、一応法要が営みうるまでに金堂が出来上るのに、寺地が決つてからは七年、金堂の造営が始められてからは五年かかっていることになる。法隆寺の金堂の場合も、この年月とさほど大差はないものと考えてよい。

いま因みに、その後の山田寺の造営進捗をみてみると、癸亥年天智天皇二年(663)に構塔、癸酉年天武天皇元年(673)に建塔心柱、丙子年天武天皇四年(676)上露盤、と記録されており、起塔よりその完成まで約一三年であり、これは、舒明一三年の造寺着工より数えて三五年目である。その間、孝徳天皇五年(649)に願主蘇我倉山田石川麻呂の讒死もあったが、概ね、ここにみられた三、四十年というのが、主要伽藍の造営に要する期間とみてよいと思う。法隆寺の場合、天智九年(670)の創建法隆寺罹災の後、二、三年のうちに新た

に寺地が整備され、天武朝のはじめに金堂を起工したとすれば、五重塔・中門など主要伽藍の完成したと思われる和銅年まで、その間、約四十年を要したことになる。山田寺と比べてみて、ほぼ妥当な年月と思われるのである。私は、法隆寺の再建プランが立ち、寺地の整備が行われたのは、罹災後二、三年以内と考えている。再建された法隆寺金堂の建築様式を天智朝末乃至は天武朝はじめと推定する所以である。この私の考えを駁するに、識者は、上宮聖徳太子伝補闕記(註一九)および聖徳太子伝曆(註二〇)にみる、

斑鳩寺被災之後、衆人不得定寺地。

を以てするであろうが、この一条は、聖徳太子乃至は法隆寺有縁の人びとの茫然自失の有様を表現しえて妙があるが、この状態が、何年もの間続いて、法隆寺の再建が放置されたとみるのは、いささか速断にすぎるといわざるをえない。官の造営とは思われない再建法隆寺にして、なおかつ堂宇にみざる豪壯の気魄は、なによりも当時の在野有縁の人びとのエネルギーを如実に示すものといえよう。

ここに、再建法隆寺金堂の起工年代について、敢て問題を提起する所以は、法隆寺金堂自身の様式年代を明確にすることなしには、それとの様式比較の上においてのみなしうる玉虫厨子の様式年代の解明も不可能であり、また法隆寺問題の解明なしには、飛鳥・白鳳美術再検討の緒口も見出しえないからである。

(註一) 大塚博士還曆記念美学及芸術史研究」(昭和六、一、一〇)八〇四頁。

(註二) 前出 八〇二頁。

(註三) 高橋順次郎・望月信享編「聖徳太子御伝叢書」(昭和一七、九、三〇)九七頁。

(註四) 既出「大塚博士還曆記念美学及芸術史研究」八〇二頁。前出 八〇三頁。

(註五) 拙稿「玉虫厨子制作年代考」——玉虫厨子の制作地について」(既刊「成城文芸」第十七号)参照。

(註七) 伊東忠太「法隆寺」(昭和一五、一一、一〇)創元社版二二〇頁。

伊東博士の法隆寺建築に関する最初の論文は、「法隆寺建築論」として、すでに明治三十一年に東京帝国大学紀要(工科第一冊)に掲載された。建築様式論の最先駆といえる。

(註八) 法隆寺若草伽藍址の発掘は、昭和一四年一月石田茂作博士らによって行われた。この発掘によって、創建法隆寺と想定される四天王寺式伽藍址の所在が確かめられ、法隆寺再建非再建論争は、急転直下、あらたな段階に入ることとなった。発掘の報告については、

石田茂作「法隆寺若草伽藍の発掘」(総説飛鳥時代寺院址の研究)一六七頁 昭和一九年一、一五)参照。

なお、若草伽藍址発掘後のあらたな法隆寺再建非再建論争の展開については、

足立康「法隆寺再建非再建論争史」三五二頁以降参照。

(註九) 福山敏男「飛鳥時代・建築」(図説日本文化史大系第二巻 昭和三二、三、二五)二六九頁。

(註一〇) 前出 二七三頁。

(註一一) 法隆寺罹災年代皇極二年説がはじめて主唱されたのは小野玄妙博士の「法隆寺堂塔造建年代私考」(寧楽 六)においてである。皇極二年十二月、蘇我入鹿に追われた山背大兄王一族は、斑鳩寺塔中において、自ら経死してしま

うが、「上宮聖徳太子伝補闕記」は、この時の光景を「賊臣等目唯看黒雲微雷掩于寺上」と記している。これを法隆寺の罹災と解したわけである。なお、この事件で斑鳩宮は焼失している。

(註一二) 村田治郎「支那建築史より見たる法隆寺系建築様式の年代」(宝雲)三六冊 昭和二一、四、一)二三三頁。

(註一三) 野間清六「飛鳥、白鳳、天平の美術」(昭和三三、八、二〇)前出 二四頁。

(註一四) 前出 二四頁。

(註一五) 上野直昭「日本美術史上代篇」(昭和二四、四、五)八九頁、九〇頁。

(註一六) 既出「支那建築史より見たる法隆寺系建築様式の年代」二三三頁。

(註一七) 拙稿「玉虫厨子制作年代考」——文献上より見た玉虫厨子の制作年代について」(成城文芸)一八号 昭三四、五、二〇)参照。

(註一八) 既出「聖徳太子御伝叢書」四三頁。狩谷望之証註、平子尚補校「上宮聖徳法王帝説」(岩波文庫版)一三三二頁。

(註一九) 前出「聖徳太子御伝叢書」七頁。
(註二〇) 前出 四一頁。

二、玉虫厨子を法隆寺系建築と見做す ことは出来ない

(1) 鍔葺の屋根について

すでに述べてきたように、玉虫厨子の建築的意匠は、法隆寺系の建築様式に属するものとして、殆んど、誰れからも疑われることなしに今日まで信じられてきたのであるが、はたしてそうであろうか。

私は、ここ数年来、法隆寺の宝蔵にある玉虫厨子のまゝに立つたがに、その疑念が、次第に深まってくるのをおぼえたのである。建築的細部についてはしばらく措くとしても、その宮殿様仏龕全体のもつ形式感情 Formgefühl は、法隆寺金堂のそれとは、どうしようもなく異質なものとして感じられてくるのであった。それが主として何に起因するか、最初はそれほど深くは考えなかったのであるが、或る日、法隆寺の帰りに、中宮寺に寄り、そこにある天寿国繡帳のまゝにかがみこんでいるときに、そのなかの鐘楼図に描かれている入母屋造の屋根が、玉虫厨子の屋蓋と全く同じ形式であることに気がついたのである。即ち、両方とも入母屋造とはいふもののともに所謂、鍔葺（しころぶき）なのである。この鍔葺といふのは、兜の左右後ろに首を覆うて垂れている鍔（しころ）に似た形状から来ている名称であり、四注造りの上に切妻造をのせた、入母屋造の原始型ともいふべき屋根の形なので

ある。法隆寺の金堂は、いうまでもなく、普通の入母屋造であり、よどみなく流麗に流れてくるこの屋根の線と、鍔葺である玉虫厨子の、途中の段で屈折したまた継起する屋根の線とは、それぞれの屋根のもつ感情も、大いに異ならざるをえないのである。しかしこの玉虫厨子の屋根も、従来法隆寺金堂の屋根と同じ入母屋造としてののみ考えられ、玉虫厨子の鍔葺については、これまであまり注意がはらわれなかったようである。日本建築において、それぞれの建物に奏でられる造型感の、主旨ともいふべきこうした屋根の形式感に、玉虫厨子の場合、いままでも殆んど注意がはらわれなかったというのは考えてみれば迂濶すぎたようにも思われる。

さて、この玉虫厨子の鍔葺の屋根についてであるが、さきに述べた天寿国繡帳の鐘楼図にも同様に、こうした鍔葺の屋根の型式が認められることは、この天寿国繡帳が、推古天皇三〇年(602)の制作年銘(註一)をもついわば標準作だけに、鍔葺の入母屋造が盛行した様式年代を推す上できわめて好都合といわざるをえないのである。又、草創推古元年とされている(註二)、灘波の四天王寺の金堂も、いままでの度々の修復にも拘らず、屋根の形式は古式にのつとつて、やはり近年まで天寿国繡帳同様の鍔葺を伝えてきていたのである。こうみてくると、こうした鍔葺の屋根は、推古時代の寺院建築における最も顕著な一特徴をなしていたものと考えられるのである。

では、このように推古建築の著しい特徴と推考される鍔葺

の源流は、中国建築史の何時の時代に求められるべきであろうか。玉虫厨子の鍍葺について、飯田須賀博士は、次のような見解を述べていられる(註三)。

「其の鍍葺なる事は最も注目すべきで、入母屋造の原始形を示すものと見られ、漢代以来の伝統を残すものと思われ。玉虫厨子は百済乃至梁の製作と考えられて居るが果して梁の作とすれば南朝系の入母屋造りは北朝系に比して古式を多く留めて居る事となり、又百済の作とすれば半島に於ける漢建築の伝統が残存したとも解釈される。此の問題は斗拱に就いても同様である。」

ここで同博士は、鍍葺をして漢代以来の伝統を残すものと述べていられるが、漢代の中国建築に見る屋根の形式は、石造の小遺構、明器、画像石等によって推定するところでは、わずかな例外(入母屋や方形)はあったとしても、四注造と切妻造とが、その殆んどすべてであったと考えられなくもないのであり、飯田博士も、漢代の入母屋造の遺例としては、不確かではあるが、わずかに明器にその一例をみるかぎりであるとして、その稀少さを指摘していられる(註四)。中国建築史の上に、入母屋造が、遺物としてはつきり現われるのは、北魏の竜門石窟時代を俟たなければならぬのである。しかもわずかに、竜門石窟古陽洞の右壁第二層に、屋蓋形仏龕として、その一例をみるばかりである。その造像年代は未詳ではあるが、延昌二年(513)より以前と目されている(註五)。こうみえてくると、博士が、鍍葺をして、漢代以来の伝統を残

すものといわれている意味は、かならずしも漢代に、入母屋造の原始形としての鍍葺があったという発生的な意味ではなく、むしろ漢代の伝統的形式感を継いでいるというふうに解しておく方が、例証に足る確実な遺品がみあたらぬ以上、ここではその方がよさそうである。

朝鮮における漢代建築の影響は、漢の楽浪郡設置により統治下四百年余にわたって、深く浸透し、宏く拡散していったものと考えられ、或る意味では、政治的、文化的変貌のきわまりない中国大陸よりは、古い漢代の伝統を温存しえていたものと思われるのである。なお、飯田博士は、「玉虫厨子は百済乃至梁の製作と考えられて居るが」という前提のもとに「果して梁の作とすれば南朝系の入母屋造りは北朝系に比して古式を多く留めて居る事となり、又百済の作とすれば半島に於ける漢建築の伝統が残存したとも解釈される」と述べていられるが、玉虫厨子を梁作乃至は百済作とする前提に、すでに疑義がある。玉虫厨子を舶載品とする考え方は、従来少なからずあったのであるが、玉虫厨子の用材や建築的細部の検討からして、今日、玉虫厨子を本邦作とみる十分な根拠があるので(註六)、ここはむしろ玉虫厨子の様式の源流としての百済乃至は梁というふうにい直して下きたくてしかるべきだと思ふのであるが、如何であろうか。なお玉虫厨子を梁作とする見方は、関野貞博士の説であるが、博士は、我が飛鳥時代の様式は主として百済に負うものであり、その百済の様式は中国の南朝特に梁の様式の影響になったものであるとして、

飛鳥様式の源流を北魏とする説、或いは高句麗からの影響説を全く認めていないのである(註七)。しかし、検討に足る南朝の遺物遺品が皆無に等しい現在、この関野博士の梁説を実証することは不可能に近いのである。もっとも関野博士は、南京より発見された塼との比較により、百済公州出土の塼を梁の影響下になったものとみて、梁説の根拠とされるのである(註八)、舶載容易な塼と、建築とでは、当然様式伝播の在り方も決して一樣ではない筈である。私はむしろ、建築においては、すでに述べたように、高句麗であれ、百済であれ、その濃淡の差はあっても、やはり朝鮮における漢代建築の伝統から長年月に影響されてきたものを重くみたいのである。

ともあれ、飯田博士がいわれるように、鍔葺という屋根の形式が、漢代建築の伝統を継ぐものであるとしても、その源流を中国建築史の上に求めて考証することは、遺物遺品が皆無といってもよい今日、まづ不可能に近いのであるが、先年百済で発掘された文様画塼のなかに、この鍔葺屋根をもった家屋がみつかったのである。即ち、昭和十二年三月、扶餘郡窺岩面外里の一丘陵から、種々の珍しい文様をもつ方形の画塼が十数枚発見されたのである。画塼の文様は、蓮花文、過雲文、鳳凰文、蟠竜文、蓮座鬼形文、岩座鬼形文、鳳凰山景文と色々あるのであるが、そのうちの人物山景文と呼ばれるもののなかに、重疊たる山岳を背景にして、一雙の鷓尾を挙げた鍔葺の屋根をもつ家屋が現れてきたのである。次に、有光

教一氏の報告によつて(註九)、その図相を見てみたいと思ふ。

「右隅近くに一人の僧形の人物が立ち、又略々中央には一屋をあらわしてある。この点景は群峯並びに岩石が抽象化された図式的表現であるのに対して、寧ろ写実的で、人物は顔貌、衣文の皺曲に至るまで精細に写し、家屋は入母屋造で玉虫厨子の如き鍔葺の屋根を有し、上に一雙の鷓尾を挙げた様を判然と示している。まことに面白い点景であつた。」

玉虫厨子との比較は、この鍔葺の屋根にとどまらず、画塼の種々の文様と、厨子の彩画との間にも、興味ある問題を提示するのであるが、それはさておき、この山景文における鍔葺の家屋をみてみると、これは、その右手前に、一人の僧形の人物が配せられている点からみて、この家屋を、仏寺建築と見做して差支えないものと思うのである。しかも、その写実風の描法から推して、当時の寺院を模したものと考えられるのである。この扶餘出土の画塼は、概ね百済の扶餘遷都(388)以降と推定されるので、その様式年代は、同じく先年扶餘郡において発掘された、四天王寺式伽藍配置の軍守里廢寺と時代を同じくするものと考えられるのである。

この扶餘軍守里廢寺は、昭和十一年と十二年との二回にわたつて、石田茂作博士一行によつて発掘されたものであるがその遺蹟の性質と意義については、発掘者の石田博士の言に俟つのが、この際最も適切と思われる(註一〇)。即ち、

「是等の推定基壇のうち塔・金堂・講堂が南北の一直線上

に配され、其の塔・金堂をかこみて廻廊の連る配置は、恰も内地の大阪四天王寺の規模と全く同規に出づること新たに注意せらるなり。大阪四天王寺は推古天皇元年物部守屋の乱平定の後聖徳太子御建立の古刹にして、創建後幾變遷を経ると雖も、其の規模が旧制を厳守せりとは広く世に認めらるゝ所なり。されば今我国に仏教を伝へたる百濟聖明王の都城扶餘の地に於いて、我四天王寺と同様配置の寺址を見る事は、最も意義深き事と云ふ可し。しかのみならず本遺蹟に於ける堂塔配置の距離關係を察するに、中門址より塔址の中心に至る距離八十三尺、塔中心より金堂址中心まで八十尺、金堂址中心より講堂址中心まで百二十尺を示し、今仮りに塔址と金堂址との距離を「一」とすれば、中門址と塔址との距離は「一」金堂址講堂址との距離は「一倍半」となり、我國飛鳥朝の同様配置をもつ右四天王寺大和田山田寺等の堂塔關係距離の比に甚だ近似せる事は兩者の關係の特に密なるを思はしむ。」

このように、百濟の扶餘から発掘された廢寺址の伽藍配置が、今日建立年代の記録が明白に残されている飛鳥時代の四天王寺や山田寺と同じ、所謂四天王寺式伽藍配置をとっているという事は、とりもなおさず、飛鳥時代の四天王寺式伽藍をもつ仏寺建築が、概ね百濟建築の直模に近いものであったことを物語るものといえよう。そして、この百濟様の建築は、すでにみてきたように、同じく百濟の扶餘から発掘された山景人物画塼像のなかの、鍔葺の屋根をもつ寺院の例より推して、その屋根は、当然鍔葺と考えてよいであろう。石田

博士もいわれるように、もし現在の四天王寺をして「創建後幾變遷を経ると雖も、其の規模が田制を厳守せりとは広く世に認めらるゝ所」であるならば、戦災前にみた四天王寺の伽藍配置と、金堂にみる鍔葺の屋根とは、飛鳥時代における百濟様四天王寺系建築の典型的な時代的特徴を、相關的に示すものと考えられるのである。

なお、ここで断っておきたいのは、これからさき私は、百濟直模の伽藍配置と建築様式をもつ仏寺建築を、四天王寺系建築と呼称し、法隆寺西院伽藍のように、廻廊内に、金堂・五重塔を左右対称におく伽藍配置をもち、また屋根の形式として入母屋造を示している法隆寺系建築に対比せしめたいと思う。そして、いまのところ概念内容のきわめて曖昧な、飛鳥建築乃至は飛鳥様式という呼称は、しばらく避けることにしたいと思うのである。

もっとも、この四天王寺式伽藍配置をもつ上代寺院のみが仏教初伝当時の、朝鮮直模の建築様式を伝えているわけではない。というのは、日本書紀によつて崇峻天皇元年(589)の建立とされている飛鳥寺も、これまでやはり四天王寺式伽藍と見做されてきていたのであるが、去る昭和三一、二年の三回の発掘調査によつて(註一一)、いままでに類をみることもなかった、回廊内庭の中央に塔をおき、その北と東と西の三方に金堂をおくという異つた形式であることが判明したのである。昭和一三年に発掘された、朝鮮三国時代の高句麗の首都であつた平壤の清岩里廢寺の遺址も(註一二)これとよく

似て、中央の建物の、東西北の三方に堂を配しているの、飛鳥寺の伽藍配置は、この清岩里麴寺の直模形式とみて、普通には、四天王寺式の百済様に対して、高勾麗様と目されているが（註一三）、この見方に疑義を呈するむきもないではない（註一四）。私自身は、これまでの史家一般の高勾麗文化に対する評価は、あまりにも低きに過ぎたのではないかという疑いをもち続けてきているので、むしろ仏教初伝当時における高勾麗様の影響は、当然のことと考えているのである。

ともあれ飛鳥寺の伽藍配置形式が、高勾麗様であれ、百済様であれ、崇峻天皇年間に建立されたこの飛鳥寺の建築様式がその後の推古天皇年間の諸寺建築にもまして、朝鮮直模の様式を踏襲していたであろうことは、十分にうなづけることである。さきに述べたように、鍛葺の屋根の形式が、漢代建築の伝統を継ぐものであるとすれば、高勾麗様建築にあつては、尚更らのこと、この古式の形式が伝えられていたものと考えられるのである。故に、ここでは、百済様であれ、高勾麗様であれ、ともかく仏教初伝当時の、朝鮮直模の仏教建築の最も顕著な特徴を、四天王寺式伽藍配置と鍛葺の屋根におき、これを、いまのところ朝鮮にはその源流をみない、従つて和様化された構想によつたものとしての法隆寺式乃至それに類似する伽藍配置と、鍛葺の発展的形式としての入母屋造ともつ法隆寺系建築に対比せしめて、四天王寺系建築と総称しておきたいのである。かくして私は、玉虫厨子にみる建築的意匠を、その鍛葺の屋根ゆえに、ともあれ法隆寺系建築

よりは一時代先行する四天王寺系建築を模したものと目しておきたいのである。天寿国繡帳における鐘樓図の建築もまた同様である。以下、厨子の細部様式の検討を俟って、この予見は、しだいに明かにされるはずである。

なおここで一つの疑義が提出されるであろう。それは、現在の法隆寺金堂は、白鳳の再建以来、幾度かの修理に堪えてきているわけであるが、そのために、最初は玉虫厨子の屋蓋と同様に鍛葺であった金堂の屋根が、後世ある機会に、今日見るがごとき入母屋造に改修されたのではないかという疑問である。疑問というよりは、むしろ法隆寺金堂の屋根の復原形式を、玉虫厨子同様の鍛葺と目して、今日までいかなる建築史家もあやしむところがなかったといった方がより適切であるかも知れない。例えば、天沼俊一博士の日本建築史図録にも（註一五）、

「当初は鍛葺であった筈であるが、現在は普通の入母屋造本瓦葺、」

という説明がみえている。伊東忠太、岡野貞而博士以来これまでの建築様式史家一般の、玉虫厨子の宮殿様建築を、法隆寺系建築の雛型と目してあやしまない様式観を支えるものとして、こうした屋蓋の復原形式への想定があつたことは、否めないであろう。しかし、そうした想定も、昭和九年以来長年月をかけて大規模になされてきた、所謂法隆寺昭和修理の調査報告が先年なされるに及んで、にわかには崩れてくることになったのである。即ち、終始解体修理工事に従われた浅

野清博士は、法隆寺金堂の屋根の復原形式について、次のように結論していられる（註一〇）。

「屋根は勿論現在のように野屋根を造ったのではなく、極上に打たれた板上直ちに瓦が葺かれたのであろうけれど、この上層屋根の構造を見ると、軒樞は柱上方に当る桁と雲肘木や屋根で差出された出桁の間に架渡され、軒樞尻上に屋根樞の下端を受ける桁がおかれていて、軒樞との間に間を隙かせて屋根樞が配され、軒樞は直材、屋根樞は反り材であるからこの骨組は如何にも玉虫厨子の屋根に見るような鍔葺にふさわしく思われたのであるが、詳細に吟味すると、反証が出て来て、返って入母屋造であつたと考えざるを得なくなつたのである。

鍔葺と云うのは、玉虫厨子に見るように、身舎と庇とを一流れの屋根に葺かず、身舎屋根下端と庇屋根の間に少し段をつける葺方で、農家の屋根は大低身舎を草葺にし、庇を瓦葺にして、所謂鍔葺にされている。

入母屋と考えられる証拠は二つある。一は慶長修理に屋根棟の先端が切断されて、不明に帰していたため判らなかつた問題で、その復原結果によると、極下端の納りが入母屋造に該当すること、二は桁端に於ける極の納りが入母屋造に適し、鍔葺に適しないことである。」

浅野博士は、さらに詳細にその反証の理由を挙げていられるが引用の煩瑣をさけて省略しておく。なおここで、屋根樞と軒樞との骨組に関して「この骨組は如何にも玉虫厨子の屋

根に見るような鍔葺にふさわしく思われたのであるが」と述べている点は注目してよい。即ち、骨組の主要構造は、前時代の手法をそのまま承けているわけであるが、外観は、新時代の感覚を表現してゆく必要を迫られたために、勢い過渡的な急場しのぎの細工が二、三なされているわけである。そうした細工の痕跡の発見が、浅野博士の復原金堂入母屋説の拠り所となっているのである。では、この新様式の感覚とは何か。新工夫がどここされた、この入母屋造を復原してみると次のようになる。

「かくしてこの骨組に従って入母屋造の屋根を造れば、類例を絶した強い反りの屋根となるのであるが、これがその特色であろう。元来金堂屋根の高く急にされているのは、水を取るための必要に起因するものではなく、高く、強く、鋭い屋根を作るためであつた。この高く鋭い感じを、葺飾又首の反りと、この入母屋々根の異常な撓みが遺憾なく強調しているように思われるのである。」

この高く、強く、鋭い入母屋造の屋根の大棟にも、やはり一双の鴟尾が、大きく雄渾な姿をみせていたのであろうが、このように復原されてくると、当初の法隆寺金堂の入母屋造の屋根が、どのような形式感情を持っていたか、またそうした新様式の屋根の感覚が、鍔葺の屋根のそれに対して、どんなに新鮮なものであつたかも容易に想像されてくるのである。玉虫厨子の宮殿と、法隆寺金堂とが、はたして同じ建築様式のものであろうかという私の疑惑は、本稿のはじめで述

べたように、それぞれの対象全体から受ける形式感情 Form-
sensual の相違にあつたのであり、その印象は、主として兩
者の屋根の形式、即ちそれぞれの屋根の線の流れから受ける
感じの違いに発していたのであるが、当初の法隆寺金堂は、
浅野博士が復原されているように「類例を絶した強い「反り」
の入母屋造であり、玉虫厨子の屈折継起する鍔葺の屋根と
は、今日にもましてその形式感情の相違は明かであつたもの
と思われる。再建法隆寺の金堂は、覆うべくもなく新時代の
象徴であつた。玉虫厨子を、法隆寺金堂の雛型とみる見方も
また、法隆寺金堂を、旧時代の擬古様式とみる見方も、決し
て妥当ではないであらう。次に、その具体的な実証として、
それぞれの細部について比較検討してゆきたいと思う。

(註一) 天寿国繡帳の由来および制作年については、上宮聖徳法
王帝説に、同繡帳にかつて縫著してあつた銘文が所掲され
ている。聖徳太子の歿年である推古天皇三〇年(622)に、
妃橘大郎女よつて発願、造像された旨、記されているが
その制作年銘は信じてよいものと思う。

(註二) 日本書紀 推古天皇元年秋九月の条に(日本古典全書

武田祐吉校註 日本書紀四 二二二頁)

「是歳、始造四天王寺於難波荒陵。」

と記されている。

(註三) 飯田須賀斯「中国建築の日本建築に及ぼせる影響——特
に細部について」(昭和二八、一〇、三〇)二四七頁。

(註四) 前出 二四五頁。この入母屋造と目せられる明器は、ニ
ューヨーク博物館蔵品(中国造営社彙集第五卷第二期図版

一二の丙)

(註五) 水野清一、長宏敏雄「竜門石窟の研究」(昭和一八、一
二、一)一〇三頁 図版七九下。

(註六) 拙稿「玉虫厨子制作年代考」——玉虫厨子の制作地につ
いて」(「成城文芸」一七号 昭和三四、二)
建築細部の様式論からの本邦説としては、
村田治郎「玉虫厨子は何処で作られたか」(「仏教芸術」第
二号昭和二三、一一)参照。

(註七) 関野貞「日本建築に及せる大陸建築の影響」(「日本の建
築と芸術」昭和一五、六、一〇)一三頁。

(註八) 関野貞「博より見たる百済と支那南北朝特に梁との文化
關係」(「朝鮮の建築と芸術」昭和一六、八、三〇)参照。
なお同論文の初掲載は、「宝雲」第一〇冊、昭和九、八。

(註九) 有光教「朝鮮扶餘新出の文様博」(「考古学雑誌」二七
卷一―号 昭和一二、一一)一〇頁。

(註一〇) 石田茂作「扶餘軍守里廢寺址の発掘」(「総説飛鳥時代
寺院址の研究」附篇四 昭和一九、一、一五)一九五頁。
なお、百済時代の遺蹟と遺物の概観については、左の好
著がある。

梅原未治「初期仏教關係の遺跡と遺物」(「朝鮮古代の文
化」七 昭和二一、一二、一一)

(註一一) 奈良文化財研究所「飛鳥寺発掘調査報告」(昭和三三、
三)

(註一二) 小泉頭夫「高勾麗清岩里廢寺址の調査」(「仏教芸術」
三三号 昭和三三、一、一五)参照。

(註一三) 福山敏男「飛鳥時代・建築」(「図説日本文化史大系2」

(昭和三二、三、二五) 二六六頁。

(註一四) 浅野清「飛鳥寺の建築」(既出「仏教芸術」三三三号)

六頁。

(註一五) 天沼俊一「日本建築史図録 飛鳥奈良平安篇」(昭和

八、一二、一〇) 第二〇図法隆寺金堂上層屋根 一七頁。

(註一六) 浅野清「法隆寺建築綜観」(昭和二八、九、一、一)

一九頁。

(2) 檼の形状とその配列について

さきに私は、主として屋根の形式と伽藍配置形式との相関的な観点から、法隆寺系建築に先行する建築様式として、四天王寺系建築とでも称すべき、朝鮮直樸の様式について述べてきたのであるが、この四天王寺系建築の様式的特徴を、さらに明確化するために、先年、四天王寺の遺跡より発掘された軒隅部の檼(たるき)について、幾分詳しく述べておきたいと思う。

すでに飛鳥寺の発掘については、その高勾麗様ともいわれられている特異な伽藍配置の発見について、述べてきたところであるが、ほぼ時期を同じくして行われていた四天王寺の発掘においても、全く意表外な状態で、貴重な遺物が発見されたのである。即ち、旧講堂の北側基壇址そばのやや西偏りのところで、創建当初の建物のものでと思われる軒隅の部材の痕跡が発掘されたのである。つまり屋根の隅の部分が、銅製の風

鐸やそれを吊った金具をつけたまま、そっくり軒隅の部分が組まれたままで、大風か地震かで振りちぎられて飛び、それが今日まで埋っていたのが、発見されたのである。木質の部分はすっかり腐ってしまったのであるが、その周囲に塗られていた丹土がそのまま残っていて、檼や隅木や尾檼らしきものの形を示していたので、木が腐ってやわらかくなっていたその内部の土をとり出し、そこに石膏を流し込んで雄型を作ったわけである。その結果、きわめて重要なことが発見されたのである。即ち、このときの檼は丸檼であり、しかも放射状に配された扇檼(おおぎたるき)の形式になっていたのである。その発見について報告者の浅野清博士は、次のように述べていられる(註一)。

「ところで扇檼というやり方は日本にもあるが、それは鎌倉時代に宋から伝えた様式の伝統をうけたもので、平安時代以前の建築には絶えてみられないものである。ところが中国や朝鮮では扇檼が通則であって、我國の檼のようにどこまでも建物に直角に配して、隅木に檼を配付けて行くやり方は存在しないのである。それで実いうと、古い時代になぜこのような中国風の扇檼が存在しないのかむしろ不思議であったのであるが、それがここに出てきたのであるから大変である。われわれは手を打って喜んだ。それにこれは丸檼になっていて、法隆寺のような角檼のものとは違うのである。これで日本の建築史も突如としてにぎやかになったのである。」
この全く偶然の発見が、上代美術史上どれほどの意義を有

するものであるかは、この浅野博士の短い言葉のうちにも、十分に察せられるのであるが、ただ博士が、「実いうと、古い時代になぜこのような中国風の扇椽が存在しないのかむしろ不思議であった」といわれているのは、どういう意味なのであろうか。もしそれが、いままでの法隆寺諸遺構には、なぜ中国風の扇椽が存在しなかったのであろうかという発想の仕方であれば、その考えの根底には、やはり法隆寺系建築をして飛鳥時代の様式と目している、これまでの建築史家一般の抜き難い通念が、無意識の裡にも横たわっていたといえるのではないだろうか。私は、それをあやしむのである。白鳳時代に再建された法隆寺遺構が、現存する木造建築の最古であるならば、それを遡る時代、即ち飛鳥時代の木造建築の細部について、直接それを検討する手だては、いままで古瓦や基壇などの発掘によって若干の推測をする以外は、ほとんどなかったであり、それだけにむしろ、この未知の飛鳥時代の建築は、当然仏教初伝当時の朝鮮直模の様式を踏襲していたであろうという推論が自然に成り立つはずである。何度も繰返して述べてきたように、この未知数の、そして当然、朝鮮直模の様式を踏襲しているものと見做される時代の建築を、既知の、それ以降の時代の新様式を示す法隆寺系建築に區別して、四天王寺系建築と名づけておくのであるが、この四天王寺址発掘から全く偶然に発見された椽が、朝鮮直模ともいふべき、一軒（ひとのき）扇椽の円形断面をもつ丸椽であったことは、当然といえば当然であり、法隆寺系建築の様

式的特徴の一つである、一軒平行椽の方形断面をもつ角椽に對して、それに先行する四天王寺系建築の様式的特徴を一層明確化したものとして、重要視されるのである。玉虫厨子の建築的意匠が、はたして四天王寺系、法隆寺系いずれの様式に属するものであるか、玉虫厨子宮殿の軒廻り、就中その椽の検討が、ここに問題となってくるのである。

玉虫厨子宮殿の軒廻りの特徴は、主としてその椽と斗拱に見られるわけであるが、まず椽についていえば、その特徴は一軒平行椽の円断面をもつ丸椽にある。即ち、一軒であることは、四天王寺、法隆寺の場合と同様であるが、（二軒の平行椽、即ち地円飛角と称せられている丸い地椽、方形の飛檐椽の二軒が用いられるのは、奈良時代の建築を俟たなければならぬ）その一軒の椽の配列方法は、法隆寺と同じように壁面に對して直角に平行して並んでおり、隅軒で放射状に配されている四天王寺の扇椽とは異っている。しかし、椽の断面についていえば、玉虫厨子の椽は、四天王寺の椽同様、円断面をもつ丸椽であり、法隆寺の椽の、方形断面をもつ角椽とは、明らかに區別されるのである。

まず丸椽についてであるが、これは、玉虫厨子の建築的意匠を、法隆寺系建築からわかきわめて顕著な、四天王寺系建築の様式的特徴の一つと考えたいのである。四天王寺の椽が丸椽であることは、すでにみてきたところであるが、さきと同じく朝鮮直模の建築として四天王寺系建築に目しておいた飛鳥寺もまた、その椽は丸椽であったであろうことが、先年の

発掘で十分に推察されることがなつた(註二)。即ち、出土瓦のなかにまじつて、蓮弁文様のついた、円形の榿先瓦が発見されたのである。榿先瓦というのは、榿の先端の木口に打ちつけられた一種の飾り瓦であるが、その形は榿先瓦の断面の形に応じているので、この榿先瓦の形をみて、榿の断面形が判るわけである。もつともこうした瓦は、かなり前からすでに飛鳥寺で発見されていたのであるが、このたびの発掘では、榿の木口に打ちつけてあったものと思われる鉄釘が、その瓦の中央孔にそのまま腐蝕附着した状態で掘り出されてきているので、この種の飾り瓦を榿先瓦と目することには、もはやなんの疑いをも挟む余地もないわけであり、この円形の榿先瓦の出土は、飛鳥寺に用いられた榿が、円断面をもつ丸榿であったことを、何にもまして強く実証しえていることになるのである。なおこれは従来あまり注意されなかつたことであるが、玉虫厨子の榿の先端にも、飛鳥寺出土の榿先瓦と同じような、円形の六葉蓮花文の飾金具が、釘でもって打ちつけられているのである。この飾金具が、榿先瓦を模したものであることは、その円い形状と、蓮花文の装飾と、そして中央を貫く太い釘からみても、明かなところである。即ち、玉虫厨子のこの榿先きの飾金具は、榿木口の装飾として、当時ににおける榿先瓦の実際の使用法を示す甚だ貴重な好資料となりえているのである。

では、他方法隆寺系建築にあつては、その角榿は、どのような榿先瓦を打ちつけてあつたのであろうかが次に問題とな

るのであるが、法隆寺についていえば、先年の所謂昭和修理の結果、五重塔には榿木口に透彫飾金具を打った痕跡が認められたのである。これに對して、金堂の榿木口には、塔のような飾金具が打たれた形跡はなく、桁や梁などの木口とともに黄土塗であつたものと推定されている(註三)。何れも榿木口の装飾として、瓦製の当を使用していない点、とくに注意されてよい。法隆寺の建築においては、なぜ榿先瓦が用いられなかつたのであろうか。塗色および飾金具への変容は、何に由来するものであろうかが改めて問われてくることになるのである。

さて、すでに見てきたように、玉虫厨子の榿の先端に打ちつけられた飾金具が、四天王寺系建築における榿先瓦の模したものであるとするならば、法隆寺金堂の角榿における黄土の塗色、同じく五重塔の角榿の透彫飾金具は、それぞれ何に由来したものであろうか。この問題に照明をあたえるためにまず上代建築において、榿先瓦の使用が、どのような状態になされていたかをみてみたいと思う。勿論きわめて少ない出土例に頼る以外にはないのであるが、幸いすでに石田茂作博士の詳細な研究があるので(註四)、参照させて戴きたいと思う。年代は、博士の推定にそのまま従ふことにして、とくにいまここでは、榿の形状が問題なので、榿先瓦の円形、方形の別を書き加えながら、任意に簡略引用してゆきたい。

(一) 飛鳥寺(奈良県高市郡) 発見。円形二種。文様は素弁の八葉の蓮花文。大型(径五寸)とやや小径(径四寸)の

両様で、小型の方は中房に蓮子をつくり弁に鎬を立てるが、大型のものにはそれが無い。飛鳥期。

(二) 山田寺(奈良県磯城郡) 発見。円形二種。文様は単弁八葉の蓮花文。弁のかたちや中房の模様は同所発見の軒丸瓦のと全く同じものである。大型は径五寸五分、小径は四寸五分、それぞれ中房に六顆、五顆の蓮子がみとめられる。共に白鳳期。

(三) 坂田寺(奈良県高市郡) 発見。円形。文様は単弁八葉の蓮花文。弁中の胡桃形大にして弁に反転をつくる点において山田寺のとは趣を異にする。中房の蓮子にもその周囲に圓円がみられる。復原径四寸八分。白鳳期。

(四) 広隆寺(京都市太秦) 発見。円形。文様は素弁八葉の蓮花文(不確か)。復原径は約四寸八分。飛鳥期。

(五) 大隆寺(岐阜県揖斐郡) 発見。方形。文様は方形の輪郭に複弁八葉の蓮花文をあらわし、四隅に忍冬文を配し中房に十二顆の蓮子を作り方形の孔を穿っている。復原型は方四寸五分。白鳳期。

(六) 法安寺(愛媛県周桑郡) 発見。円形。文様は複弁八葉の蓮花文。その大きな中房には約十顆の蓮子を配している。径四寸五分。白鳳期。

これが、飛鳥、白鳳時代のものとも目されている種先瓦のすべてである。このほかに、栗原寺址、東大寺講堂址、栗栖野窯址、大野廢寺の名があげられるのであるが、いずれも白鳳末期乃至は奈良期以降なので、ここでは、四天王寺系、法隆寺

系の両建築に直接関係はないものとして割愛しておくのである。ともあれ、きわめて僅かな発見例なので、いささか心もとないのであるが、それでも明かな傾向としては、円形の種先瓦に対して、方形の種先瓦が著しく少ない点が、まず指摘される。即ち円形五に対して方形一である。そしてこの方形一は、即ち大隆寺の種先瓦は、その複弁八葉の蓮花文と忍冬文の文様より推して、白鳳期のものであることは、まず疑いえないところである。これに対して、円形五のうち、飛鳥寺、広隆寺の種先瓦は、花卉面になんの装飾もない素弁式であり、これを飛鳥期と目して差支えなく、また山田寺、坂田寺のものは、花卉面に甚から変化した子葉形乃至は胡桃形が一つずつあらわれてくる所謂単弁式であり、石田博士によれば、ともに白鳳期に数えられるのであるが、私は、山田寺のものを飛鳥末期に、坂田寺のものを白鳳前期と、それぞれ見做しておきたいのである。山田寺についてはその金堂の造営が進められていた皇極天皇期前後を、いずれの時代に編入するかによって論の分れるところであろうが、山田寺の伽藍配置が、四天王寺式であることより推して(註五)、山田寺の造営はなお四天王寺系建築の様式を踏襲していたものと考えたのである。また、坂田寺の伽藍配置については未詳であるが、飛鳥期の創建であることは、推古紀一四年の条に記されているところである(註六)。伊豫国法安寺発見の種先瓦は、その複弁八葉の蓮花文よりみれば、確かに飛鳥期の作風とは言い難いのであるが、この法安寺もまた四天王寺式伽藍であ

り、その主要伽藍は飛鳥期の創建とされているのである（註七）。このようにして見てくると、その遺址より円形の極先瓦の発見されている寺院は、田寺も合わせて一様に飛鳥期の建築乃至それを踏襲しているものといえるようである。なおここで注目を要するのは、山田寺である。なぜならば、四天王寺式伽藍を伝え、軒廻りに丸極をもつこの山田寺の建立年代は、恐らく、この後に、四天王寺系建築の様式年代の下限を推定する上で、きわめて重要な役割をはたすものと考えられるからである。しかしこの問題はしばらく傍らに控えておき、さらに、円形、方形の極先瓦の源流を索めて、朝鮮における三国時代乃至新羅統一時代の遺址に眼を向けなければならぬ。

さて次に、朝鮮の上代寺院遺址について、極先瓦の発見例を求めてゆくのであるが、やはり石田博士の精緻な報告のなから、さきに倣って任意な引用を許して戴くことにしたいと思うのである（註八）。

(一) 双北里廢寺（扶餘郡扶餘面双北里）発見。円形二種。

文様は一つは素弁一二葉の蓮花文、中房に六顆の蓮子をつくり径七寸。一つは素弁八葉蓮花文中房に蓮子四顆を配し径六寸。共に百濟時代。

(二) 軍守里廢寺（扶餘郡扶餘面軍守里）発見。円形二種。

文様は共に単弁八葉の蓮花文、中房に方形の孔が穿つてあるが、一つは四顆の蓮子をつくり径四寸二分で、他は蓮子五顆を配して径五寸五分。共に百濟時代。

(三) 扶蘇山（扶餘郡扶餘面）発見。円形五種。その一つ一つ葉の素弁蓮花文をあらわし径六寸、中房の輪廓は二重で内に五顆の蓮子を配し方形の孔がある。その二は文様は同じであるがやや小型で径五寸五分。その三は素弁八葉にして径六寸。中房の輪廓は二重で内に四顆の蓮子を配している。あとの二つも素弁八葉であるが、一つは径五寸、中房は単廓で蓮子八顆を配し方形孔をもつのであるが、他は径は同じであるが中房に太い廓があつて六顆の蓮子を配している点が異なるわけである。この扶蘇山は百濟滅亡の頃、王宮のあつたところ、往時この地に諸種の建築があつたことが推測される。百濟時代。

(四) 佳塔里廢寺（扶餘郡扶餘面）発見。一辺長三寸三分の正方形。文様は獅子鼻鬚髻の鬼面をあらわし中央鼻頭に方孔が穿つてある。新羅統一時代に属するが。

(五) 新元寺（公州郡公州邑）発見。円形一種、方形一種。文様は円形は中房に花文を図しそれを繞つて心臓形六個を配している。径四寸二分。方形のは鬼面をあらわし、鼻頭に小孔をもつ。一辺長二寸。共に新羅統一時代。

(六) 四天王寺（慶州郡）発見。円形一種、長方形三種。文様は円形のは復弁八葉蓮花文。蕊をめぐる中房に八顆の蓮子を配し直径三寸五分。長方形のもの、その一は三寸に四寸の長方形で忍冬文をあらわし、その二は二寸五分に三寸、四葉単弁の中房に六顆の蓮子のある蓮花文で縁釉を施したもの。その三は二寸に二寸五分で四弁花

文。いずれも縦長の方形である。新羅統一時代。

(七) 普門寺（慶州郡）発見。円形、三種。文様は、面に裝飾のある八葉蓮花文で、中房をめぐって蕊をつくる直径七寸のものと、六葉宝相花の径四寸五分のもの、および小六花形の直径二寸のもの。新羅統一時代。

(八) 南山里（慶州郡）発見。円形、径三寸三分。文様は復弁八葉蓮花文、周りに珠文帯をめぐらしている。新羅統一時代。

(九) 興輪寺（慶州郡）発見。長方形一種、円形一種。一つは三寸五分に四寸五分の長方形の輪廓に四弁花文をあらわし、弁の外縁にさらに小花弁を作る。二つは径五寸の円形に八葉の裝飾弁と八顆の蓮子のある中房がある。新羅統一時代。

以上が朝鮮の上代寺院址より発見された極先瓦の諸例であるが、ここで見て判るように、扶餘郡における百濟時代の極先瓦は、少くともこの例でみるかぎりには、すべて円形であり、その文様は八葉形を主とする素弁乃至は単弁の蓮花文である。その点、さきに見てきた飛鳥寺、山田寺、坂田寺、広隆寺出土の素弁乃至は単弁八葉の蓮花文様をもつ円形極先瓦とそれぞれその系統を同じくするものといえよう。円形極先瓦にみる蓮花文は、普通には、そのときの建築の屋根に使用された軒丸瓦（註九）の蓮花文と照応するものであるが、前記飛鳥諸寺址出土の円形極先瓦にみる素弁乃至は単弁の八葉の蓮花文は、まさしく今日百濟瓦と称されている百濟出土の軒

丸瓦の最も顕著な様式的特徴である。素弁八葉蓮花文の系統を示すものといえよう。もともと仏教初伝当初、本邦にもたらされた屋根瓦は、かならずしも百濟瓦ばかりではなく、高句麗系統のものもあったわけであるが、数においてはやはり百濟系統の瓦が多かったものと考えられるのである。なお古新羅の瓦について附言すれば、やはりその軒丸瓦の文様は、素弁八葉の蓮花文であり、百濟瓦との大きな差異は認められないのであり、新羅統一時代を迎えて、はじめて劃期的な新様式があらわれることになるのである。

さきに掲げた、朝鮮上代寺院址の極先瓦の出土例よりみても、統一時代を迎えた新羅に、唐文化の影響下、新様式の寺院が、首邑慶州を中心として陸統と建立されてゆく様がよく伺われるのであるが、出土された極先瓦に最も著しくあらわれてきた変化は、まずなんといっても方形極先瓦の出現であり、また円形極先瓦における複弁蓮花文への変移である。方形の極先瓦および複弁蓮花文の円形極先瓦は、扶餘出土の百濟極先瓦には全くみられなかったものである。こうした新様式の著しい拾頭を、新羅統一当時の政治的背景からみて、初唐様式の影響と目して恐らく大きな誤りはないであろう。因みに、百濟の滅亡は天智天皇二年（663）であり、さらに高句麗を亡ぼして新羅の統一をみるのは、天智天皇七年（668）に至つてである。推古天皇二十六年（618）の隋滅亡後五十年にして、唐の勢力は朝鮮全土にもおよぶことになったのである。これは劃期的事件であり、漢魏以来の古い伝統の上に六

朝様式を継いできた朝鮮三国時代の旧様式も、ここに大きな変容を迫られざるをえなかったのである。広州出土の方形種先瓦および複弁蓮花文をもつ円形種先瓦は、そうした新様式展開のなによりの実証といえる。そしてこうした新羅統一時代の種先瓦にみる新様式への変貌は、同様に慶州出土の軒丸瓦や軒平瓦にも顕著にみられるところである。軒丸瓦の文様もまた、複弁蓮花文を基調としてきわめて多様複雑に意匠の変化をみせていくことになるのである。とくに、その様式的特徴よりして俗に唐草瓦と称せられている裝飾文様入り軒平瓦の（註九）多種多様の出土は、これまでの三国時代の朝鮮においては、その出土例が皆無に等しかったものだけに、様式史を劃する重要な意味をもつのである。三国時代における所謂この唐草瓦の出土例は、関野貞博士の報告によれば、僅かに高勾麗に一例あるばかりである。即ち博士は（註一〇）、

「高勾麗時代の瓦当は余の知る所数千種に上れども悉く巴瓦にして安鶴宮址の外一片の唐草瓦をも発見したことはない。これ、高勾麗は漢代に於けるが如く長く唐草瓦の使用を知らなかつた為であらう。唯独り安鶴宮址から両三種の唐草瓦を発見せるは高勾麗晩年に至り支那の影響により製出されたのであらう。」

と述べていられる。かつて平壤附近にあったこの安鶴宮を、博士は「恐らく高勾麗の別宮にて其の瓦の堅緻他に比類なく技巧も亦精鍊文様も他に比すれば多少後れてゐた様である。多分高勾麗末期に属すべきものであらう。」（註一一）と目し

ていられるが、高勾麗の末期は、隋乃至は初唐時代に当るわけであり、安鶴宮址におけるこのきわめて貴重な軒平瓦の発見は、朝鮮における裝飾軒平瓦の出現が、初唐様式の流入を俟ってはじめてなされえたという事実を、さらに傍証するものといえよう。要するに私は、初唐の新様式に接触した新羅統一時代というものが、建築様式史の上で、いかに重要な役割をはたしていたかを、改めて強調したいのである。この認識の上になつてみて、はじめて慶州周辺における方形の種先瓦出土の、ひいては新羅統一時代における角種出現の様式史の意味が明らかにされてくるはずである。

さて、ここで私は、日本における方形種先瓦の唯一の例を示す、岐阜県揖斐郡大隆寺発見の種先瓦に話を戻さなければならぬ。石田博士によれば、この大隆寺発見の種先瓦は、

「方形の輪郭に複弁八葉の蓮花文をあらわし四隅に忍冬文を配し、中房に十二顆の蓮子を作り方形の孔を穿つたもので、復元の大きさは方四寸五分と知られる。白鳳時代に属す。」と説明されているのであるが、この種先瓦の方形の形状といひ、またその文様の複弁八葉の蓮花文といひ、さきにもみてきた慶州出土の種先瓦の様式的特徴を明確に示しているものといえる。蓮花文の四隅に忍冬文を配す仕方も、慶州四天王寺出土の一つに、その類似のものを見出すことが出来るのである。このことは、本邦における方形の種先瓦が、これまでの素弁乃至は単弁式の蓮花文をもつ円形の種先瓦と、全く別の様式的系統の上にあることを、即ち仏教初伝当時における

百済や高句麗の影響から全く脱していることを、ありのままに示しているものといえよう。ということは、こうした方形の椀先瓦をもつ角椀が、上代寺院建築の軒先きに現れるのは、百済や高句麗の直接の影響が衰えはじめ、隋・初唐の新様式がなんらかの流入径路をへて、あらたにもたらされてきたからのごとくであるといえるのではあるまいか。何らかの流入径路という意味は、かならずしも統一新羅をへてとのみ断言することも出来ないからである。隋が滅亡し唐が興るのは推古天皇二六年(608)にあたる。第一回の遣唐使として、犬上御田鍬が唐に渡ったのは、舒明天皇二年(609)であり、二年後の舒明天皇四年(612)には唐使高表仁、学問僧靈雲、僧旻らが来日している。新羅を経由してではあるが、すでに唐との交渉はひらけていたのである。その後、彼我の交渉は陸路、海路を通じて、かなり頻繁に行われているのを見るのであるが(註一二)、これに対して我が国の新羅との交流は、齊明天皇七年(601)の百済救援の出兵前後から跡絶えてしまふのであり、天智七年(668)以降の新羅統一後、はたしてこの新興新羅から、どれほどの影響をうけたであろうかは、かなり疑問となってくるのである。唐との交流以前、すでに推古天皇一五年(607)の小野妹子、鞍作利たち第一回の遣隋使によって、大陸交流への道はひらかれてはじめていたのである。私は、推古時代の終った舒明天皇のはじめ頃から百済の滅亡する天智朝のはじめ頃までを、朝鮮三国のこれまでの旧様式と、隋初唐新様式との新旧様式の系統がよろ

やく相竝んで受容され、それが平行かつ混和して消化されてきた時代と考えているのである。ともあれ、私は、すでに推古朝中期において大陸との直接交流の道はひらかれていたのであり、それに続く舒明、皇極、孝徳、齊明各朝にあって、朝鮮三国との交流は、いよいよその密接度を加えるのであるが、それとともに、この間にあって初唐との交流の実もようやく本格的にあがってきたことを、この際指摘しておきたいのである。いままで所謂飛鳥様式を、朝鮮三国の旧様式乃至はその延長の上へのみ位置づけてきた見方に対して、とくに注意を喚起しておきたいのである。

話がかなり先きに進んでしまったので、再び岐阜県大隆寺址出土の方形の椀先瓦に戻すのであるが、要するに、本邦における方形の椀先瓦は、新羅統一時代の方形の椀先瓦と同様に、隋・初唐様式を継ぐものであり、この方形の椀先瓦より推して、角椀を軒先にもつ上代寺院建築もまた、日本においては、隋・初唐様式の受容以降のものであると推定せざるをえないのである。再建法隆寺の角椀もまた、この観点から様式的的に位置づけられるべきであるが、なぜ法隆寺の場合、その角椀の木口には、椀先瓦がみられずに、金堂の椀木口には黄土塗が、また五重塔のそれには透彫金具がほどこされているのであるかという疑問が残るはずである。私は、それを直様式の和様化の現れとみるのである。法隆寺の建築意匠に、すでに朝鮮乃至は大陸からもたらされた新旧諸様式の混合と、またその独特の和様化がみられることは、すでに識者

の指摘するところである。即ち、極木口の意匠からのみみれば、大隆寺址出土の極先瓦は法隆寺のそれより、大陸直模の形式を残すものであるといえよう。この際、大隆寺の極先瓦をもつ角種と、法隆寺金堂の極先瓦を打ちつけない角種との相異を、年代の差と考えるかどうかは大隆寺建立の年代が未詳なのでなんともいえないが、法隆寺の金堂と五重塔の場合には、金堂極木口の黄土塗から五重塔極木口の透彫金具への移行には、約二、三〇年の時間的経過がみられるわけである。他に法隆寺系建築とされている法起寺三重塔遺構の極も勿論角種であるが、その木口に極先瓦や飾金具が打たれてあった形跡をみない。先年雷火によって焼失した法輪寺三重塔についても同様である。つまり、極木には極先瓦をみないのは、法隆寺系建築の一特徴とみてよいであろう。これは一見なんでもないようであるが、かなり重要なことと思われる。その着色も法隆寺金堂の極木口の黄土塗にあつては、特別な装飾とはいいがたく、桁、梁などの木口と同様に塗られた黄土であつて、連子々の緑青とともに、他のすべての部分の丹土塗に対して塗換えられていたにとどまるのである。つまり法隆寺金堂の極木口は無装飾であつたとしても差支えないわけであり、これは木口をその無装飾とすることのない漢代以来の中国建築の伝統からすれば、きわめて異質の試みといえるわけである。椽頭装飾のことは、すでに漢代の文献にしばしばあらわれるところである(註一三)。法隆寺金堂極木口の無装飾は、もしこうい方が許されるならば、簡素を

尚ぶ日本建築の伝統的な感覚からきているのではないであろうか。四天王寺式伽藍配置のプランから法隆寺伽藍配置プランへの変更に、きわめて大膽な変容への意志力を感じるとすれば、こうした極木口の無装飾化にきわめて自然な自己感覚への回復が感じられるのである。そのほかの建築的細部についても、これまでの四天王寺系建築に比べると、手法や造形の上に、かなり自由な選択取捨が行われているのを見られる。こうしたいわば和様化への自由さは、法隆寺系建築のもつ時代様式性を、仏教初伝当時の朝鮮直模の四天王寺系建築と、盛唐様式を色濃く受けざるをえなかつた奈良時代の建築との間にあつて、一層特徴づけることになつたのである。

これに対して、法隆寺五重塔の極木口にみる透彫金具は、極木口装飾化への移行を示すものであり、そこに早くも盛唐様式を模してゆく、奈良時代の建築感覚のきざしをみる事が出来るのである。では、極木口に金銅の飾金具を打ちつける仕方は、はたして奈良時代に盛行をみていたものであろうか。いま南都十大寺の一つ西大寺の宝亀十一年(80)勅録の資財流記帳巻第一に、次のような記載がみえているので、引用しておきたいと思う(註一四)。即ち、堂塔房舎の篇中、金堂院の薬師金堂一字の条に、

桶端金銅華形卅六枚、各着鈴鐸等、

また、同じく弥勒金堂の条には、

桶端各着金銅葛形、

という記載がみえている。ここで桶は、「椽」の誤字であり、

楯は、元來、椽、檼、椽とともに椽を意味し、とくに楯は、字の示すように、方形の椽、即ち、角椽に充てられるのである。この二つの例によって、西大寺の主要伽藍である薬師、弥勒両金堂の椽木口に、それぞれ華形と葛形の飾金具が打たれていたことが判るのである。ところで、この弥勒金堂椽木口の葛形というのは、恐らく蔓草模様の謂であり、所謂唐草文を意味するものとみて差支えないであろう。かつて法隆寺五重塔の椽先を飾っていた透彫金具の文様もまた、こうした唐草様の文様であった。ここに両者の類似、或は系統の同一が考えられてくるのである。天平宝字八年(766)に創建された西大寺は、その資財流記帳に記された堂塔の意匠よりみても、例えば、薬師金堂の屋上大棟の真中に、火炎形の宝珠が燦然と赫くといった具合に、その唐様式への模倣はきわめて著しかったものと考えられるのであるが、椽木口を飾金具で覆う仕方または、盛唐様式をそのまま踏襲したもののも一つであろうと想像されるのである。椽木口にみるこうした盛唐様式への模倣は、すでに、五重塔椽木口の飾金具の使用にどうしようもなく現れてきていたものと推察されるのである。即ち、まさに法隆寺金堂の無裝飾の椽木口にみえてきたような、法隆寺再建当初における様式和様化への意志は、やがて盛唐様式への眩しい魅力のまえに次第に消えてゆくのであるが、そうした様式変容の奥にひそむ内的動機を、法隆寺建築におけるこの二つの椽木口は、如実に示しているのである。黄土塗の角椽木口から透彫金具の角椽木口への移行は、単なる同

一様式内の発展的変貌とは到底目しがたいのである。法隆寺金堂の様式模倣を余儀なくされながらも、五重塔細部の意匠は、すでに新様式への眼覚めをどうしようもなかったのである。全く同一建築様式と目されてきた法隆寺の金堂と五重塔における、全く同一形式の角椽においてすら、かくの通りであるとすれば、こうした法隆寺建築における角椽と、玉虫厨子における丸椽との形式的差異については、また何をか言わんやである。この椽の形状の相違一つをとりあげても、私は玉虫厨子の宮殿建築を、法隆寺系建築の一つと見做すことは、到底出来ないものである。私はこれまでの通説を排したいと思う。そのため、私は、法隆寺系建築に先行する時代様式として、仏教初伝当時の朝鮮直模様式を想定し、これを四天王寺系建築と仮称し、玉虫厨子の建築様式を擬するに、この四天王寺式様式を以てしたのである。しかし、実際には、今日遺構の全く残されていない四天王寺系建築の復原は、まことに困難をきわめざるをえない。かくしてまた、玉虫厨子の椽に関して、あらたな疑義が提出されることになるのである。

玉虫厨子宮殿の椽が、一軒の丸椽であるということ、それは厨子の屋蓋が鍔葺の屋根であることと相俟って、私に、玉虫厨子建築の時代様式について再考を促す手だてとなったのであるが、玉虫厨子の様式をして法隆寺系建築に先行する朝鮮直模様式に属するものとの確信をひそかに抱かせるに至ったのは、やはり四天王寺、飛鳥寺兩寺址の発掘によってであ

る。即ち、四天王寺址における軒隅木部の発見と、飛鳥寺址における極先瓦のあらたな出土をえたときからであった。玉虫厨子の極先飾金具の文様が、素弁六葉の蓮花文であることによりやく気がついたので、新出土の飛鳥寺の極先瓦の一つと(註一五)、たまたま、その文様がきわめてよく符合していたからである。玉虫厨子の丸極に對する関心は、こうした飛鳥寺址新出土の極先瓦や、明らかに丸極の形状を示す四天王寺址の軒隅木部の発見によって、いよいよ深められたわけであるが、同時に、玉虫厨子の極が、円形断面の丸極という漢代以来の伝統的な形状を模していながら、その配列においては、一軒の扇極という伝統的な形式を排しているのはなぜであるか、玉虫厨子の、法隆寺金堂の角極にみるがごとき一軒平行極は、様式史的に何を意味するものであるかという疑問も深められていたのである。四天王寺址発見の軒隅木部に示された丸極の一軒扇極の配列は、なによりも仏教初伝當時の上代建築の、その朝鮮直模の性格を直截に語るものであった。玉虫厨子を、四天王寺や飛鳥寺と並べて、四天王寺系建築と目することは、はたして妥当であろうか。扇極より平行極への移行がここに問題となるのである。

扇極というのは、平行極が、法隆寺金堂の軒廻りにみられるように、すべての極を壁面に配して並べてあるのに対して極を軒隅では放射状に配している配列法であるが、現存遺構中最古の例とされる漢代の石闕に(註一六)、こうした一軒の扇極の形式はすでに認められるのであり、漢代以来の中国建

築における最も伝統的な様式の一つと目することが出来るのである。すでに述べてきたことであるが、扶餘靑岩面廢寺出土の山髯文様磚の、鐵葺の屋根をもつ家屋図にみえてきたように、漢代建築の伝統をかなり後まで温存しえてきた朝鮮三國時代の建築に、伝統的な一軒の扇極の形式が伝えられたであろうことは、円形極先瓦の出土例と相俟って十分に考えられるところである。事実、去る昭和二年(1927)、扶餘東南里にある天王寺址附近より出土された金銅塔片の極は、はっきり一軒の扇極であることを示している(註一七)。なお報告者は、この金銅塔片の「発見された位置の寺址の名は『三國史記』に出ているので、これを一応、百濟時代の遺品と見ていであろう」と述べているが、この極が断面の扁平な方形状を示している点、また軒反りがきわめて強烈である点より推して、かならずしも一概に百濟の作と見做すことも出来ないようである。しかしいま、かりにこの金銅塔が、新羅統一前後の時代に、新羅乃至は唐から舶載されたものと考えたとしても、一軒の扇極という極の配列形式が、なおその時代に存したことは、十分に傍証されるはずである。

では一体、玉虫厨子や法隆寺金堂にみる平行極が、中国の建築史上に現れるのはいつ頃であろうか。雲岡石窟などの諸例にみる極の配列は、大部分未だ丸極による一軒の扇極を示しているものといえる。なかには扇極の形式が不明瞭で、平行極かと疑われるものもないではない。平行極が明瞭な形で遺構の上に現れてくるのは、飯田須賀斯博士によれば北斉の

石柱においてであり（註一八）、その実例の示すところでは、軒隅に大きな隅木を作り、平行に配列された椀が、軒隅ではその隅木に配付になっているのである。しかし、この北斎の石柱にみる例は、所謂地円飛角の二軒の椀構造において示されたものであり、玉虫厨子にみられるがごとき丸椀の一軒、或いはまた法隆寺金堂にみられるがごとき角椀の一軒の構造ではなかつたのである。ただここで、すでに六朝時代末の北斎に、平行椀の使用とともに、二軒の地円飛角の椀構造が現れていることに注意しておきたいと思う。では、平行椀という配列形式が、いかなる構造上の必要があつて現れてきたのであるかについても述べておかななくてはならぬ。屋根の反り椀の反りの発生と関係があると考えられるからである。

元来、椀は挺の法則によつて軒先を支えているわけであり、椀の部分には椀の支点となり、椀より外の力と椀より内の力とが平衡するように作られているが、それを軒の隅まで平行に作れば、椀は力点を失い、さらに支点をも失つて、ただ軒の隅木に配付して懸下するだけのものとなるわけである。こうした構造上の無理を承知で、あえて扇椀から平行椀への移行が試みられたのは、主として屋根の形に変化を来したためである。つまり漢代の屋根は一切直線であつたが、六朝になると、屋根の断面にも軒にもそれぞれ反りが生じてきたのである。この場合、屋根の反りは椀の内側であれば、母屋の高さを変更し順次に急勾配にして、これに椀を架け渡せばよいわけで、構造的に簡単に解決出来るのであるが、椀より

外側即ち軒先に到つては、このように簡単な処理が出来なくなるのである。しかもこの屋根の反りに加えて、さらに軒隅にむかつて軒反りをつけることは、かなり難しいわけである。もし漢代以来の手法でもつて、軒隅に放射状の椀の配列を行えば、屋根自体は反つても軒隅の反りは解決出来ないものである。その解決法としては、まず大きな隅木を作つてこれに反りをあたえ、この隅木に、椀を中央部の椀に平行のまま配付けていくのである。こうすれば軒隅の椀は、軒椀からは外れて、椀本来の構造上の意味を失うわけではあるが、軒反りの目的は達せられることになるのである。さらにいえば、本来の椀の上に軒先でさらに椀を重ねてゆく二軒の方法は、屋根の反りを、軒先においていよいよ強めてゆく要求から生れた構造といふるのである。丸い地椀、角の飛檐椀をもつ所謂地円飛角の二軒の椀は、屋蓋構造のすべてに、凹曲線状の強い反りをあたえようとする、六朝末期以降の、とくに唐代における造型感情の熾烈さから必然的に生れ、かつ盛行をみせた時代様式と考へて差支えないようである。扇椀から平行椀への変化および一軒から二軒への移行は、要するに屋根の反りと軒反りを生むために、構造上、相関的かつ必然的に要求された技法であり、そうした細部のな様式変容の背後にも、漢代建築に伝統的であつた直線的なるものから、新時代の曲線的なるものへと指向する歴史的な形式意志が、大きく流れていたのである。鍛葺から入母屋造りへ移行する屋根の形式の変化も、構造的にはこうした扇椀から平行椀へおよび

一軒から二軒へという変化を伴つてのことと考えて差支えないであろう。なお北宋以降、二軒の扇樞をもつて軒を反らせる方法が生れ、今日におよび、日本にも鎌倉以後の建築に影響をあたえているが、その構造については、直接の必要がないのでいまは触れないでおく。

では、こうした様式的状況のもとで、玉虫厨子が、丸樞の一軒の平行樞を示しているというのは、いかなる様式的史的意味にもとづくものであろうか。鍔葺の屋根をもち、丸樞で一軒である以上、当然扇樞の配列が予想されてしかるべきではなかつたか。そこで斗拱との關係が問題になつてくるのである。玉虫厨子の樞にみる平行配列を、軒廻りの斗拱との關係において着目なされたのは、村田治郎博士をもつて嚆矢とする(註二〇)。玉虫厨子の軒廻りには、所謂雲斗雲肘木の斗拱が、正面と背面の中ほど左右に二組ずつ、両側面にそれぞれ一つ、そして四隅にそれぞれ一つ、合せて十あるわけであるが、そのうち、正面と背面とにある斗拱二組ずつが、法隆寺金堂の場合のように壁に直角にはなく、少し外側にむけて斜に出ているのである。これは、恐らく玉虫厨子宮殿にのみ特有の斗拱の張出しと考えてよい。博士は、ここに着目した次のように述べていられる。

「この場合に斗拱二組の出かたは、正面と背面との壁の中央部から放射状になつていて、それは屋根の垂木が屋根の中央から放射状、すなわち扇に配列されたのと、全く同じ方向である。斗拱とかんたんに言ったが、雲形斗拱には尾垂木も

ちゃんと組み合わさっているので、上部と構造的に關係が深いことを示すものであり、結局屋根の扇垂木の方向に一致させる目的から、このように斗拱をことさらに外向きにしたに相違なからうと推定したい。仮りに構造的にはその必要がなかったとしても、外觀から言えば一致させた配置にしなければならぬ所である。」

博士は、さらにこうした斗拱との關係において、平行樞の問題にふれ、そこから玉虫厨子の制作地を推定しておられるのである。

「もしこの解釈が成り立つとするなら、そこに問題をとく鍵があるのではないか。斗拱が外向きになつてゐるに拘らず、玉虫の厨子の垂木配列は、日本でいつも使う方法を用いて、斗拱の方向を無視しているのである。かかる斗拱の方向と垂木配列の方法との不一致を来したのは、何故であつたらうか。その原因を私は中国建築についての知識の不足によるか、又は自国流の固執によるものと推察したい。何れにしても、これは中国の技術家の作つたものではなく、従つて中国で作られたものでもない。恐らく中国以外の技術家が中国風の模倣に若干自国風を加えた作品だろう。」

かくして、さらに博士は推論する。

「要するに細部に関する限り、玉虫厨子の制作地は中国よりも、むしろ百済か日本とすべきであるが、百済の建築細部が不明なので、果して百済で作られたか、どうかを決定することは困難である。それに反して日本を製作地と見なすこと

に対して、不都合な点は少しもなく、特に垂木の配列方法に至っては最も日本風が強く、また垂木と斗拱との間に配列方法の矛盾があるに至っては、中国文化を直接にとり入れた地方のやり方というよりも、間接にとり入れてそこに自国風を加えやすい立場の、日本で作った可能性の強いことを、最もよく示すものではないかと考える。」

私は、村田博士のこの結論に賛成したい。恐らく、これまでの様式史の立場からなされた玉虫厨子本邦説のなかでは、最も具体的であり、優れた着眼とすることができるとは、私自身も、すでに用材史的立場から、玉虫厨子の本邦説にふれているので（註二）、ことさら興味をおぼえるのである。

さて、村田博士は、ここで放射状に開かれた斗拱の方向と、壁に直角に竝んだ平行極の配列方向とが不一致をもたしている原因を、「中国建築についての知識の不足によるか、又は自国流の固執によるものと推察したい」と述べていられるが、いまその当否は別として、ここでみるように、尾極までが斗拱と組み合ったまま壁面に対してそれぞれ左右斜めに開いてゆくということは、実際の建築構造上、力学的にはきわめて不合理なはずであり、到底、その実例がこれまでの中国建築史上にありえたとはいえず、私にはどうしても考えられないのである。さきにみた扶餘出土の金銅塔では（註二二）玉虫厨子と同様に、軒廻りの正面中央に二つ竝んで尾極と組み合った挿肘木が出ているのであるが、この二つ竝んだ肘木はともに壁面に直角であって、決して放射状に開いてはいない。

三国時代の朝鮮は勿論、初唐の影響下に新様式が展開された新羅統一時代においてすら、斗拱を放射状に開くということは、恐らくありえなかったであろう。尾極が、斗拱とともに放射状に開いてゆくということは、工芸品である玉虫厨子にして、はじめてありえた、かつなしいた建築的意匠であるとい、私は見做しておきたいのである。問題は、ではなぜ、こうした新意匠があえてなされたかにある。その動機となる形式意志が、いまは問題なのである。ここで二つのことが考えられる。その一つは単純にいつて、觀賞空間を考慮して、斗拱をそれぞれ左右斜めに開くという見方である。

この場合、觀賞空間は信仰空間と一致する。觀賞者即ち信仰者は、玉虫厨子なる仏龕のまえに拝跪して、厨子の宮殿を仰ぐのである。ここで私が信仰空間というのは、拝跪者が、直接にその礼拝対象に交通している *Kommunizieren* 所謂場を指しているのである。例えば今日、展覽会場でよくみることではあるが、飛鳥仏を、觀賞者の眼と同じ位置において、或いはさらに眼より下においているのは、こうした信仰空間を完全に無視している点において、適切な觀賞空間をえているとはいえないであろう。ともあれ、玉虫厨子の場合、厨子の真下に拝跪するものにとつては、中央にある二つの斗拱が、それぞれ斜外側に開いてくれた方が、斗拱の意匠をよく見るとともに好都合といえるであろう。雲斗雲肘木は、厨子の建築的意匠にとつては大事な観せどころの一つであったはずである。こうした心の動きは、造像者の立場からは、き

わめて自然な動機と思われるのである。また他方、様式史的な見方からすれば、やはり扇種の配列形式を、斗拱の上に模したと考えてみるのが、これまた自然であるのかも知れない。たしかに、両軒隅の斗拱まで加えてみると、中央正面二つとこの両軒隅二つを加えた四つの斗拱は、扇種の配列をみるように、放射状に左右に向って開いているのである。意識的に扇種の配列形式を模したか否かは別としても、そこにみる形式感情は、同じものとみて差支えないように思われるのである。時代様式について考える場合、私は、形式そのもの相違よりも、そこにみる形式感情の異同、つまりは生命感の有る無しを重要視するのである。何れにしても、壁面に対して斜左右に出る尾種及び斗拱の配列は、すでに指摘したように、構造上は不合理なものと考えられるので、実際の建築の上にその実例をみることはありえないとすれば、玉虫厨子における斗拱の配列は、純粹に視覚的な要求からなされたものと考えてよく、その形式感情は、扇種にみるそれと同じものとみて差支えないものと推考されるのである。

かくして、最後に残された最も困難な問題は、玉虫厨子の平行種についてである。鐵葺の屋根をもち、丸種、一軒の種をもつ、いわば朝鮮直樑の上代建築様式の直系ともいふべき玉虫厨子が、なぜその種の配列方法に関して、次代の建築様式に属するものと考えられる法隆寺金堂の、角種、一軒の平行種と軌を一にするのであろうか、様式史的にみれば、この問題はきわめて重要であるが、従来は、種の配列法にみ

るこうした両者の類似をもつて、漠然と玉虫厨子を法隆寺系建築に属せしめる根拠の一つとされるに止つたのである。ではたして玉虫厨子の種にみる平行配列は、玉虫厨子をして法隆寺系建築と目するに足る根拠の一つになりうるであろうか。ともあれここで問題となるのは、いかなる動機によつて、種の配列形式にこのような変更をきたしたかについてである。これに関してさきにもてきたように村田博士は「特に垂木の配列方法に至つては最も日本風が強く」と述べていられる。即ち、博士は、種の平行配列の形式を日本風とみられるわけであり、玉虫厨子を本邦作と目する根拠の一つとされているのである。しかしここでいわれている日本風、という意味が具体的には説明されていないので、いささか判断に戸惑うのであるが、もし推測が許されるならば、これを日本上代の神殿建築風という意味に解しておきたいと思う。今日、なお古制をたもつていられると思われる住吉大社や伊勢神宮などの例でみるように（註二二）、仏寺建築初伝当時の神殿建築は、概ね、直線形の破風をもつ切妻造とみて差支えない、従つて種はすべて平行に配列されていた一軒の平行種であつたといえる。こうした上代の神殿建築にみられるような一軒の平行種に対する形式感情の上での好みが、建築構造上の制約を実際には全くうけないですむ、玉虫厨子のような工芸品において、意欲的に新しく意匠化されたとしても少しも不思議はないであらう。すでに、玉虫厨子の斗拱においてそのなによりの好例をみてきたところである。また技術的な解

決さず伴えば、平行檼の手法が実際の土代寺院建築に及ぼされたとしても一向に差支えないわけである。しかしこの間にはやはりかなりの時間を必要とするのであろう。玉虫厨子の平行檼と、法隆寺の平行檼には、丸檼から角檼へ、或いは鍔葺より入母屋造へ移行する様式史的時間と同様に工芸的意匠から実際の建築に実現されてゆく技術史的時間も見逃されてはならないであろう。玉虫厨子の平行檼にみる意匠で、工芸品なればこそという例を、なによりも、屋根裏にそのまま貼りつけてある檼の反りにみることが出来る。反りのある丸檼は実際の建築においては技術的に容易ではないし、また用材を多く喰うものとして、一般には避けられてしかるべきはずである。すでに玉虫厨子の鍔葺の屋根について述べた際に触れてきたところであるが、昭和修理解体の結果、原形復原の法隆寺金堂が、決して玉虫厨子と同じ鍔葺ではないという決定的な証拠となったものは、解体中発見された古材の檼であり、その檼の構造より推してのことであつたように（註二二）種の構造と屋根の形式との間には密接な関係がみられるのである。玉虫厨子と法隆寺金堂とが、ともに平行配列の檼をもつからといって、この両者を目するに同系建築に属するものとなし、またそれを同じ様式年代に並べるといふことは、私としては、到底、なしえないのである。鍔葺から入母屋造へ、丸檼から角檼への道は、様式的には、決して坦々たる道でもまた、かりそめの時間でもなかつたとみるべきであろう。

もっともここで、法隆寺金堂の角檼は、日本の神殿建築において伝統的な角檼の手法を継ぐものであるという見方もある（註二三）。玉虫厨子の一軒の平行配列が、神殿建築のそれを模したものであるとすれば、法隆寺金堂の一軒平行配列の角檼が、神殿建築における檼の形状を模したと考えても、一応差支えないようにもみえる。もしそうであれば、法隆寺金堂の角檼が、玉虫厨子の丸檼より時代が遅れるという見方は根拠を失うことになる。なぜならば、玉虫厨子の反りのある丸檼よりは、法隆寺金堂の反りのない角檼の方が、むしろ容易に、神殿建築の角檼を模しえたといえるからである。しかし、日本上代の神殿建築が、寺院建築の伝来とかかわりなく、発生的に最も原始的といえる、そして一般的な住居形体示してきたものと考えられる切妻造を古制のまま傳承してきたことは十分に考えられるのであり、その切妻造より推して、檼が一軒の平行配列をとつていたことは疑いえないとしても、その檼が、仏教初伝当時は勿論のこと遠く古代より、方形断面の角檼であつたということについては、今日その推論を扶けるいかなる証拠も残されてはいない。むしろ古代住居の始源形ともいうべき、天地根元宮造より推して考えれば、神殿建築における檼といえども、はじめは丸太檼のような、自然木の形状を止める素朴な檼の形体の域を出なかつたものと思われるのである。私は古代における神殿建築を、宮室乃至は一般住居建築に対して、特別なものとは考えていない。しかし、私の見解を駁するに、識者は、よく今日までそ

の古制をとどめてきた伊勢皇太神宮、或いは摂津住吉大社の様式定形化された角柱をもってするかも知れない。だがここで注意しておきたいのは、今日見る伊勢皇太神宮（内宮）の正殿の形式は、桃山時代の復興形式を受け継いだものであり、古制を保つところが多いとはいえず、ようやくその建築形式の大略がきまってくるのは、たとい古く廻りえたとしてみても内外両宮の二〇年を式年とする造替の制度が定まったとみられる天武朝、持統朝年間なのであり、少くとも奈良朝時代とみれば一層確実である。享和二年（一八〇二）の火災後二年を経て再興された住吉大社にしても全く同様であり、やはり二〇年ごとの造替の制度が行われるようになった奈良時代に入ってから、ようやく今日みる一定の建築形式が定まったとみてよいのである（註二四）。思うに、それまでの神殿建築は、藤原宮の出現を俟つまでの上代宮殿建築と同じように、かならずしも、一定の形式なり制度が厳然と存在し、それがかたく踏襲されていたものとは考えられないのである。今日みるような神殿建築の様式的定形化は、宮殿建築同様、初唐文化の影響がようやく活潑に現れてくる天智朝、及びその和様化が政策としても意欲的に押し進められてゆく天武、持統兩朝を俟たなければならぬのではあるまいか。私は、神殿建築における角柱の使用は、むしろこの時代における初唐様式移入後の寺院建築より受けた影響によるものと考えたいのである。法隆寺金堂の角柱は、上代神殿建築のそれを模したものでなく、むしろ逆に、神殿建築の方が、その細部の意匠に、新

鮮な初唐様式の影響をうけていたと解してしかるべきではなからうか。奈良朝以前に、即ち、朝鮮中国より伝来された上代寺院建築の諸様式が、神殿建築にあたえてきた影響については、細部的にももっと注意されてよいはずである。例えば、神殿建築の破風の妻飾は、寺院建築の懸魚の影響なしには考えられぬであろう。私は、法隆寺の角柱については、やはり初唐様式の影響を考えざるをえないのである。岐阜県揖斐郡大隆寺址出土の、複弁八葉の蓮花文とその四隅に忍冬文を配した方形の極先瓦は、決して故なく癡寺の庭に、千三百年に近い眠りをねむっていたのではないのである。私は、新羅の都城慶州の地下にいまなお埋蔵する極先瓦の数々をおもい、また、遣隋、遣唐使の人びとが、かつて船中、長安、洛陽の甍にはるかに馳せたであろう思いをおもっているのである。

（註一） 浅野清「飛鳥寺の建築」（『仏教芸術』三三三号、昭和三

三、一、一五）五頁

（註二） 「飛鳥寺発掘調査報告」（奈良文化財研究所 昭和三三

三）三二頁

（註三） 浅野清「法隆寺西院の建築」（『総観法隆寺』昭和三四

一〇、一）七六頁七九頁

詳しくは、同著者の「法隆寺建築綜観」参照

（註四） 石田茂作「極先瓦考」（『伽藍論叢』一六、昭和二三、

一〇、三〇）二六三頁

（註五） 石田茂作「総説飛鳥時代寺院址の研究」（昭和一九、一

一五）八四頁

なお山田寺址より発見された出土瓦を、飛鳥期とみるか白鳳期と目するかについて博士は次のような見解を述べていられる。(同書二〇頁)。

「山田寺の創建に関する積極的の文獻は法王帝説裏書の『辛丑(舒明天皇十三年)春三月十五日始平地、癸卯年(皇極天皇二年)立三金堂』とある記事である。而してこの法王帝説裏書なるものは史料的に相当信憑すべきものであるとの見地から、山田寺の創建が飛鳥時代末期に入れられてゐるのである。併し乍ら、裏書の記載を更に追求して行くと、其の塔を構へたのは天智天皇二年、丈六仏を鑄したのは天武天皇六年であつて、これを書紀の其の後の記事と合せ考ふるとき山田寺の建築は、山田石川磨の死後其の忠誠が認められ彼の追福の意を含められて、天智天武兩朝の間に於いて特に盛んであつた様である。さすれば、よし其の創建は法王帝説裏書の云ふ如く舒明皇極天皇の御代にあつたと云へ、同寺址より多数出土する所謂山田寺式単弁蓮花文鍔瓦は僅かに金堂を構立した皇極天皇時代のものとするよりも、天智天武兩朝時代のものとすべきでは無いかとの疑を多分に懐かしめる。斯く考へ来るときは、従来如く山田寺出土の単弁式鍔瓦を無条件に飛鳥時代のものとして推定する事は、暫く見合はすべきでは無いかと思ふ。

以上の石田博士の疑念も一応もつともであるが、私はやはり山田寺の出土の単弁蓮花文の丸瓦及び軒先瓦は、金堂創建当時のもの乃至は、そのときの文様の踏襲であると考へてゐるのである。

(註六) 「日本書紀」四日本古典全書版二四二頁

「鳥以三此田為天皇二作三金剛寺」。是今謂三南淵坂田尼寺二

(註七) 既出「総説飛鳥時代寺院址の研究」八四頁

(註八) 既出「軒先瓦考」二六五頁

(註九) 屋根の軒先にある円い輪廓のなかに種々紋様をほどこした瓦のことであり、従来鍔(あぶみ)瓦、疏(つみ)瓦或いは俗に巴瓦と称されてきたが、私はその形状から推して平易な軒丸瓦という名称を用いたい。この軒丸瓦と軒先瓦との間を連ねている文様のある横長い瓦も、従来、宇(のき)瓦或いは唐草瓦と称されてきたが、これも軒丸瓦に対して軒平瓦と呼んでおきたいのである。裝飾文様入りの軒平瓦を、とくに唐草瓦と呼称なされたのは、関野貞博士ではなかつたかと思ふ。

関野貞「朝鮮の瓦文様」(「朝鮮の建築と芸術」所収

昭和一六、八、三〇)四四一頁

同著「日本古瓦文様史」(「日本の建築と芸術」所収

昭和一五、六、一五)六一九頁

なお軒瓦の呼称については、会津八一博士の左記の研究がある。

会津八一「古瓦の名称について」(「会津八一全集」第

三巻収録 昭和三四、四、二三)

(註一〇) 関野貞「日本古瓦文様史」(「日本の建築と芸術」所収

昭和一五、六、一五)五八四頁

(註一一) 前出 五九三頁

(註一二) 新羅統一以前における日本と隋及び唐との主要なる交

渉状況を、日本書紀の伝えるところに従って記しておく。

(武田祐吉校註「日本書紀」日本古典全書版に拠る)

- ◇ 推古天皇一五年(607) 小野妹子をはじめて隋に遣す。通事は、鞍作福利。

- ◇ 推古天皇一六年(608) 小野妹子、隋より帰る。このとき隋使裴世清と下客一二人来る。裴世清帰國の際、再び小野妹子、吉士雄成遣隋使となり、鞍作福利を通事として隋に渡る。このとき学生として派遣されたのは、倭漢直福因、奈羅訳語恵明、高向漢人玄理、新漢人大國、学問僧新漢人日文、南淵漢人請安、志賀漢人恵隱、新漢人広齊等あわせて八人。

- ◇ 推古天皇一七年(609) 小野妹子ら帰朝、通事鞍作福利は帰らなかつた。

- ◇ 推古天皇二二年(614) 大上御田歙、矢田部造、隋に遣される。

- ◇ 推古天皇二三年(615) 大上御田歙、矢田部造。隋より帰る。

- ◇ 推古天皇二六年(618) 隋滅亡、唐興る。

- ◇ 推古天皇三二年(623) 唐の学問僧惠済、恵光、医者の恵日等、さきに隋にわたつた福因等並に智洗爾等に從つて来朝。

- ◇ 舒明天皇二年(630) 大上御田歙薬師恵日を唐に遣す。第一回遣唐使

- ◇ 舒明天皇四年(623) 遣唐使大上御田歙、唐より高表仁、学問僧靈雲、僧是、勝鳥養を伴い帰朝。

- ◇ 舒明天皇五年(633) 唐使高表仁帰國。

- ◇ 舒明天皇一二年(630) 唐の学問僧、恵隱、恵雲新羅の使に從つて来朝。

- ◇ 舒明天皇一二年(630) 唐の学問僧清安、さきに隋にわたつた学生高向漢人玄理、新羅を経て帰朝。

- ◇ 孝徳天皇四年(633) 遣唐使吉士長、丹吉士駒、学問僧道敞、道通、道光、恵施、覚勝、弁正、恵照、僧忍知聰、道昭、定恵、安達、道徳、学生巨勢臣薬、水連老人等、合せて百二十一人、以上を第一船、同じく高田首根麻呂、掃守連小麻呂、学問僧道福、義向等合せて百二十二人を第二船として唐に遣される。

- ◇ 孝徳天皇五年(634) 遣唐使、高向史玄理、河辺臣麿、薬師恵日、書真麿、宮道阿弥陀、崗君宜、置始連大伯、中臣間人連老、田辺史鳥等唐都長安に至る。

- 同年吉士長丹吉士駒等唐より帰朝。

- ◇ 齊明天皇元年(635) 河辺臣麿等唐より帰朝。

- ◇ 齊明天皇三年(637) 沙門智通、智達勅命により、新羅の船にのり唐に赴く、玄昇法師に師事す。

- ◇ 齊明天皇五年(639) 坂合部連石布、津守連吉祥を唐に遣す。

- ◇ 天智天皇四年(645) 守君大石等を唐に遣す。

- ◇ 天智天皇七年(648) 高勾麗滅亡、新羅の統一成る

- (註二二) 飯田須賀斯「中国建築の日本建築に及ぼせる影響、特に細部に就いて」(昭和二八、一〇、三〇)二二二頁。

二一七頁

- (註二四) 竹内理一篇「寧楽遺文」上卷(昭和一八、七、三〇)三九五頁

(註一五) 既出「飛鳥寺発掘調査報告書」三二頁 図版PL66
の17・18・19

「今回の発掘で四種の極瓦を得た。弁の反りの大きい素弁九弁と六弁のものと、山田寺式軒丸瓦の内区を探ったものがあって、型式学的には前後の関係を示すが、前者とても飛鳥寺創建時とまでは遡らない。軒丸瓦三型式の内区のみを用いて二次的に極瓦としたものの存在などもこの一証とされるであろう。いずれにせよ、極瓦は後に補われたもので、中金堂、塔、講堂、中門、南門、西門の各建物には見られるが東、西金堂には見られない。」

素弁六葉の蓮花文の裝飾をもつ極先瓦は、図版の18に示されるものであり、玉虫厨子の極木口の飾金具の文様とよく類似している。

(註一六) 四省渠渠の馮煥墓の石闕は、丸極の一軒扇極の配列を示す最も好例といえる。後漢建光元年(122)の造立。

(註一七) 黄寿永・杉山信三「扶余出土の金銅塔片」(「仏教芸術」一三三号、昭和三三、一、一五)九六頁。なお、この金銅塔片の大きさは、屋蓋の一辺 三、五種、高さ(勾欄の上縁まで) 五、二種という小さなものである。

(註一八) 既出「中国建築の日本建築に及ぼせる影響、特に細部について」二〇一頁 二〇四頁 二一九頁 図版24軒飾の(1)。

(註一九) 極の構造上の説明については、すべて、飯田博士の前出の著書に拠ったものであることを、断っておく。(前出書 二〇〇頁)

(註二〇) 村田治郎「玉虫厨子は何処で作られたか」(「仏教芸

術」二〇号所収 昭和二三、一二)一四四頁

(註二一) 拙稿「玉虫厨子制作年代考」玉虫厨子の制作地について(「成城文芸」第一七号 昭和三四、二、二〇)三頁

(註二二) 既出「法隆寺建築綜観」一一九頁

(註二三) かつて、法隆寺再建非再建論争中、源豊宗氏が、再建説の一つの根拠として、法隆寺建築における角極をあげ、飛鳥の極の円形断面に対して、方形断面の極は白鳳式であるとしたのに対して、足立康博士は、次のように駁している。

「氏(源豊宗氏)は、飛鳥の極は丸い筈だから、角の極は白鳳式である」と云われる。元来大陸系木造建築に於ける丸極は丸太を使用した名残を止められていると云われる。然し乍ら丸太を使用しないとすれば、構造上角極は工作が容易であり、丸極は却って手間がかかる。仍って発生的の問題を別にすれば、材木の豊富な國に於いては、建築構造上角極は丸極より原始形とも云えよう。それ故日本に於ては、角極は丸極より進んだものと一本調子に定める事はできないであらう。尚一軒及び角極は日本の手法であると云う権威がある学説があること、また古い神社形式に於いては角極が使われていることを附記しておきたい。」(足立康「法隆寺再建非再建論年史」昭和一六、一〇、一一、三四九頁この発表は、昭和一四年九月「歴史地理」第七四卷第三号になされた。同年六月三日大阪毎日の講堂においてなされた源豊宗氏の「今の法隆寺は何時建てられたか」という講演に対する反駁文である。)

なお、引用文中、足立博士がいわれている「一軒及び角

極は、日本の手法であると云う權威がある学説」とは、どなたの説かいま詳らかにすることが出来ないのは残念である。

(註二四) 福山敏男「飛鳥時代・建築」(「図説日本文化史大系

第二巻」昭和三二、三、二〇)二三七頁 二三八頁に拠る

なお、関野貞博士の唯一神明造棟原型想像図では、棟を貫いて出ている千木の形状は、丸太状であり、それによって想像される極は、同じく丸太極のはずである。唯一神明は、伊勢内外宮正殿の建築形式である。(既出「日本の建築と芸術上巻」一〇七頁 第一四図)

結論 四天王寺系建築としての玉虫厨子の

様式年代

私が、この小論においてまず意企したことは、玉虫厨子の建築的意匠が、決して法隆寺系建築様式に属するものとは思われない所以を、はっきり論証することにあつた。

そのため、私は、能うかぎり即物的に、また具体的に、玉虫厨子の建築的意匠を、法隆寺金堂の建築的細部と比較することに勉め、その相違をあきらかにせんとしてきた。比較対照の場を、両者の屋蓋部、そのなかでも、とくに屋根の形式と、極の形状およびその配列のみに限定したのは、様式史的な問題の所在を、一層、精緻かつ明確に把握するためであり、また、様式細部の背後にある形式意志を、おたがいに有機的なものとして、これを相関的に理解するためであつた。

事実、極の構造が、屋根の形式を決定する主要素の一つであることは、すでにみてきたとおりである。その結果、私は、両者の差違を、些細な、単に偶然的な恣意的なものとはみず、はっきり時代様式の相違によるものと考え、玉虫厨子の建築的意匠を、法隆系建築に先行する時代様式をもつ建築に属するものと目し、その先行様式を、かりに四天王寺系建築と名付けておいたのである。故に、まずその四天王寺系建築の時代様式的特徴を明らかにし、玉虫厨子の建築的意匠がそれに相応することを、主として法隆寺金堂との比較において論証すべく勉めてきたのである。すべてを尽くしたとは思われないが、玉虫厨子の建築意匠上の様式年代を推考するに足る、いくらかの手がかりは、えられたものと考えている。

さて、私がここでいう四天王寺系建築とは、飛鳥寺や四天王寺などをその典型とする、仏教初伝当時の朝鮮直模の上代寺院建築を指していることは、すでに繰返し述べてきたところである。故に、この四天王寺系建築の示す様式的特徴は、当然、朝鮮三国時代の百濟乃至高句麗の建築様式を継ぐものとして現れてくるものといえよう。日本書紀の伝えるところによれば、飛鳥寺の創建は、崇峻天皇元年(568)であり、四天王寺は推古天皇元年(593)とされている。いづれにしても、堂塔主要部の建築は、朝鮮直模の様式を直接に踏襲したものと考えてよく、ともにその堂塔の主要なる建築は、推古期前期の基準作と目して差支えないであろう。

かくして、四天王寺系建築の様式的特徴は、まずその伽藍

配置形式において現れる。即ち、高勾麗様飛鳥寺式の配置形式であり、百濟様四天王寺式の配置形式である。塔を中心とする東西北三方に金堂を配する飛鳥寺式は、高勾麗の首都平壤の清岩里廢寺址にすでにその例をみるところであり、塔、金堂を前後して南北一線上におく四天王寺式もまた同様に、百濟の首都扶餘軍守里廢寺址に先蹤をみている。飛鳥寺式、四天王寺式、ともに朝鮮三国時代の直横形式であることは疑いえないであろう。塔、金堂を、左、右一様に並べる法隆寺式の伽藍配置とは明白な相違がみられるのである。なおこの点に關して、淺野清博士は、飛鳥寺発掘後の新たな見解として、法隆寺式をして、飛鳥寺式を簡素化したものという推測を示していられるが(註二)、この法隆寺式とは逆に、塔、金堂を、左、右におく法起寺式乃至は高麗寺式が、法隆寺式と殆んど年代を同じくして現れたことを考えれば、そうした幾つもの試みが、飛鳥寺式における塔と東金堂、塔と西金堂との配置から、創意的に着想されたであろうことは、十分に推測しうることである。しかしして、博士の卓見が妥当なものとなるためには、朝鮮直横の飛鳥寺式から、創意的な法隆寺式の他が生れるためには、かなりの年代的な開きを、最初に前提としておかななくてはならないのである。博士にこの用意が、おありであろうか。なお博士は、四天王寺式についても、次のように言及されている。伽藍配置形式の様式年代を考える上で、重要な発言なので、引用させて戴く。

「しかも(飛鳥寺は)四天王寺伽藍等よりはずっと複雑

で、いかにも完備した形である。単純なものから複雑化するといふのであればよく解るが、最初に建ったと見られる飛鳥寺の方が鄭重なのであるから、四天王寺はその退化または簡略化された形式と考えなくてはならない。」

この博士の見解には、私は、いまにわかに賛意しがたいものをおぼえる。博士の説によれば、四天王寺式は、法隆寺式同様、飛鳥寺式から派生したことになるのであるが、はたしてそうであろうか。確かに年代の上では、飛鳥寺の方が四天王寺より五年早く創建されたことになってはいる。しかし仏教初伝当時崇峻天皇元年(588)と推古天皇元年(593)との間に、どれほどの様式年代の落差がみられるというのであろうか。伽藍配置形式の変更をあえてするほどの自由な創意が、はたして推古朝前期においてありえたであろうかを疑うのである。ましてや百濟に四天王寺式の先蹤をみるにおいてをやである。飛鳥寺式、四天王寺式を、ともに仏教初伝当時の朝鮮直横の伽藍配置形式として、私の目する四天王寺系建築の、重要な様式的特徴と見做すことに、いまさら支障は起りえないであろう。むしろ問題として残されているのは、四天王寺系建築におけるこうした伽藍配置形式の下限年代をどこにおくかについてである。この問題については、次に述べる建築細部の様式年代と併せて推論されなければならないであろう。

いま、玉虫厨子の建築的意匠に則して考える場合、玉虫厨子の宮殿部をして、法隆寺系建築からわからず、あえて四天王寺

系建築を模したものと目する所以は、なによりもその屋根が、鍔葺の形式を示している点に着目するからである。朝鮮扶余の窺岩面廢寺址出土の山景人物文様埴に、鍔葺の屋根の大棟両端に鷗尾一双をおく仏殿図がみえているので、玉虫厨子におけるこの鍔葺の形式が、朝鮮三国時代の寺院建築における式的特徴を示していることは、すでに明かであり、今次戦災による焼失以前の四天王寺金堂が、度々の修復にも拘らず、なお鍔葺形式を伝えていた点、及び、推古天皇三〇年在銘の天寿国繡帳鐘樓図に、同じく鍔葺の屋根が描かれている点より推して、この朝鮮直模の鍔葺の形式は、法隆寺系建築の入母屋造に対する、四天王寺系建築の、最も著しい様式的特徴と見做されうるのである。

さらに軒廻り細部についていえば、この四天王寺系建築を法隆寺系建築からわかつ様式的特徴として、種の形状とその配列形式があげられるであろう。即ち、法隆寺系建築の、方形断面をもつ角種の、一軒、平行配列に対して、四天王寺系建築の特色とするところは、円断面をもつ丸種の、一軒、扇状の配列である。この四天王寺系建築の種にみる、円断面の形状と一軒扇状の酒列形式は、漢代建築以来の伝統を継ぐ、朝鮮三国時代の建築様式の特徴と目して差支えないであろう。なお、四天王寺系建築における種の構造が、丸種の一軒扇状配列を示すことは、四天王寺の今次発掘によつて、すでに実証をみたところである。また、飛鳥寺址からも、種の形状を何うに足る円形種先瓦が出土している。種の配列も、四

天王寺と同じく一軒の扇種とみてよいのであろう。かくして、丸種の一軒の扇状配列を四天王寺系建築の様式的特徴とみて、その円形種先瓦の出土する寺院址の建立年代より推して、四天王寺系建築の様式年代が、想定さられるはずであるが、さらに鍔葺の屋根と関連して、円形種先瓦とともに、上代寺院址の出土瓦中、その四天王寺系建築の特徴をさらに顕著にしていくなと思われる、行基葺の丸瓦について一言しておきたい。

玉虫厨子宮殿の屋根を葺いてある丸瓦が、所謂行基葺であることは、その屋根の形式が鍔葺であること以上に、あまり注意されてはいないようである。玉虫厨子の屋根は、一見して判るように瓦葺を模しているわけであるが、その丸瓦の葺き方は、普通の本瓦葺の印籠重ねとはならず、筥のように上下相重り合つた行基葺を示している。葺き方が違うということは、即ち葺いている丸瓦の形体の違いを意味する。こうした行基葺用の丸瓦が、今度の飛鳥寺発掘の際にも、普通の本瓦葺の瓦とともに発見されているので(註三)、行基葺といわれる、この特別な屋根の葺き方も、やはり仏教初伝当時の朝鮮直模のものともみて差支えないであろう。法隆寺系建築には、もはや見られない様式的特徴である。

かくして、ここに、玉虫厨子を擬するに四天王寺系建築を以てした、その四天王寺系建築の朝鮮直模の様式的特徴を示すものとして、飛鳥寺式及び四天王寺式の伽藍配置、鍔葺の屋根、行基葺、種の円形状と一軒葺状の配列をあげてきた

わけであるが、玉虫厨子の様式年代を推考する上で、いま問われてくるのは、こうした四天王寺系建築の様式下限年代である。再建法隆寺以前の遺構が、今日全く現存しない以上すべて発掘伽藍址の遺址と遺物に依拠して年代推定を行わなければならぬのである。僅かに例外としては、推古天皇三〇年在銘の天寿国繡帳鐘樓図によって、鑑葺の屋根が、なお推古朝後期にも盛行をみていたであろうことが推定されるばかりである。次に、四天王寺系建築の様式下限年代推定の根拠となるに足る、遺址、遺物を年代を追うて逐次検討してみたと思う。

さて、まず、行基葺の丸瓦である。今度の昭和修理とともに行われた法隆寺東院の斑鳩宮址発掘の際に、その出土品の中から、この行基葺の丸瓦が出土していることは、注目されてよい。即ち、浅野清博士によって、次のように報告されている。

「出土品には古瓦の他に土器類がある。旧地表や掘立柱いけ込み穴の埋戻し土中から見出された古瓦はこの遺跡の下限を定めることが出来る点から貴重であるが、これらの瓦はすべて赤色を帯び、火に遭った形跡をとどめることは注意を要する。この種瓦は何れも比較的薄手小柄で丸瓦は行基葺用のものであり、瓦当面の拾得出来たものすべて比較的薄手であった。」

これで、行基葺用の丸瓦が斑鳩宮の建築に用いられていたことは明白であるが、ともにその様式年代を同じくするもの

と考えられる軒丸瓦及び軒平瓦の出土について、さらにみておきたい。

「軒丸瓦の文様は単弁蓮花文及び忍冬文を弁中に配したもので、これらは何れも若草伽藍趾で発掘されたものの中に類似品を見るが、若草伽藍趾で出たような単弁で肉が隆起した種類のものはまだ発見されていない。軒平瓦は西院伽藍で出土する忍冬唐草文の内最も洒勁なものに似ているが、周囲の輪廓線なく唐草の肉がたっぷり盛上り、線勢は更に強靱で、この種文様の原流をなすもののように考えられる。」

ここで、斑鳩宮址から発掘出土された古瓦が、すべて赤色を帯び、火に遭った痕跡をとどめているというのは、行基葺の丸瓦、及びそれぞれの出土をみた軒丸瓦軒平瓦の様式下限年代を考える上できわめて重要である。即ち、瓦に火に遭った痕跡が残されているということは、日本書紀の伝える皇極天皇二年(543)における斑鳩宮焼失を裏付けるものであり、発掘されたこれらの出土瓦が、決してこの斑鳩宮焼失以後のものではないことを実証しているからである。かくして、斑鳩宮址出土瓦の様式下限年代をこの皇極天皇二年(543)におくことがまづ許されえよう。また斑鳩宮の創建は、日本書紀によって、推古天皇九年聖徳太子によるものと伝えられているが、いづれにしても、この斑鳩宮が、推古朝以降、太子及び、太子薨後の山背大兄王ら一族の宮室であったことは、疑いえぬところであり、推古三〇年太子妃橘大郎女造像の天寿国繡帳にみる鑑葺の鐘樓図をも併せて考えるな

らば、少くとも太子一族の時代、即ち推古、舒明兩朝の或る時期に、行基葺丸瓦で葺かれた鍔葺の屋根が盛行をみせていたものと推定されるのである。

さて、斑鳩宮址の出土瓦によって、行基葺の様式下限年代を示したこの皇極二年は、その廢寺址より円形榿先瓦を出土した山田寺(浄土寺)の金堂建立年でもある(註五)。即ち、山田寺址からは、単弁八葉の蓮花文をもつ円形榿先瓦が二種出土されているが、この二種の差は主として大きさによるものであり、蓮花文様の様式は、同寺址出土の軒丸瓦の内区と全く同じものといえる。所謂山田式単弁といわれるもので、弁面に細長い小葉がみえているが、法隆寺系建築にみる複弁蓮花文とはっきりその様式史的系統を別にするとはいうまでもない。あきらかに百済の素弁八葉蓮花文の系統を継ぐものである。山田寺址出土の軒丸瓦、円形榿先瓦の文様、及び榿先瓦の形状より推して、すでに山田寺が、四天王寺系建築に属するものとみて差支えないのであるが、さらにそれを重ねて裏付けるものは、山田寺の伽藍配置である。山田寺は、舒明天皇一三年(641)に、始めて寺地が開かれ、山田寺創建の方針を定められるわけであるが、その伽藍配置は、なお四天王寺式を承けついでおり、出土瓦の文様及び榿先瓦から当然推測される種の円形形状とともに、舒明天皇一三年創建のこの山田寺が朝鮮直模の四天王寺系建築であることを遺憾なく示していることは、四天王寺系建築の下限年代を確かめる上で、注目してよい。

では、こうした四天王寺系建築においてみられた、朝鮮直模の伽藍配形式である四天王寺式、或いは飛鳥寺式が、次期の創意的な形式と見做されている諸形式、法隆寺式や法起寺乃至は高麗寺式などに転換していくのはいつ頃であろうか。いま遺址によってその伽藍配置形式が確められている上代寺院中、年紀の方も一応判っている寺院を探してみると、舒明天皇一三年(641)の山田寺創建以降、天智天皇九年(670)の法隆寺罹災まで約三〇年の間に、僅かに、川原寺の名をあげうるばかりである。即ち、川原寺(弘福寺)について、日本書紀孝德天皇白雉四年(653)条に次の記載がみえている(註六)。

「天皇聞_レ旻法師命終_二而遣_レ使用并多送贈。皇祖母尊及皇太子等、皆遣_レ使用_二旻法布喪_一。遂為_二法布_一命_二画貊豎部子麻呂、鮒魚戸直等_二、多造_二仏菩薩像_一、安_二置於川原寺_一」
或_二本云在_二山田寺_一。」

もっとも、傍註でみるように、旻法師弔慰の菩薩像が安置されている寺を、山田寺に擬している伝承もあったことが伺われる。そこで、この二年後の斉明天皇紀元年(655)の条に伝えられる川原宮の創建もって、川原寺創建と見做す見方もあるわけである。たしかに、いままでの宮殿に塔を加えて整備してゆけば、そのまま伽藍へ移行できるのである。宮殿を寺院に喜捨するのは、仏教初伝当時以来の慣習でもあったのである。ともあれ、川原寺の創建は、孝徳朝末乃至は斉明朝はじめと目しておいて差支えないであろう。

さて、この川原寺の伽藍配置についてである。これまで、川原寺の伽藍配置形式は、漠然と法起寺式に数えられてきたのであるが(註七)、去る昭和三二年より翌三三年にかけてなされた発掘調査によって、これまでに目ざされていた塔と金堂との関係位置に、勢い変更をきたさざるをえなくなったのである。即ち、塔と西金堂が東西左右に相並び、その北側裏後に北金堂を置くという新形式が発見されたのである。この川原寺の伽藍配置形式を、飛鳥寺式の省略的変容とみるか、或いは、四天王寺式の附加的変容とみるかは、何とも確めえないが、いずれにしても、この川原寺の伽藍配置形式をもつて、これまでの飛鳥寺式乃至は四天王寺の朝鮮直模形式からの離脱とみることは可能であろう。伽藍配置の変更は、普通には、容易なことでは行われえない様式史上の一大転換期を劃するものとみて差支えないとするならば、この川原寺の創建されたとみなされる孝徳朝末乃至は斉明朝はじめを境として、これ以後、上代寺院の上に、ようやく新旧様式の交替が活潑に見られるようになるのであろう。こうみても、旧様式衰退の兆は、たしかに山田寺金堂着工の皇極天皇二年(643)に、早くも蘇我入鹿による斑鳩宮焼打ち、山背大兄一族の非業の死によって象徴的に現れていたともいえる。仏教初伝以来名実ともに旧時代のパトロンのであった蘇我氏の滅亡は、すでにその二年後に迫っていたのである。こうみても、四天王寺系建築の様式下限年代を、山田寺金堂着工の皇極天皇二年(643)乃至は、その完成年代と目さ

れうる孝徳天皇大化四年(648)におくことが、妥当のようには思われるのである。故に玉虫厨子制作の下限年代もまた、当然これに準ずるものと見て差支えないであろう。

四天王寺系建築の様式下限年代を、期せずして大化改新(元年645)前後と目する結果になったのであるが、これはかならずしも偶然ではない。山背大兄王ら一族の滅亡、相繼ぐ蘇我氏一族の滅亡は、単に旧時代のパトロンの喪失にとどまらず、仏教初伝以来四分の三世紀にわたるこれまでの朝鮮経倫政策の上にもきわめて大きな変更を来さざるをえなくなったからである。加えて、すでに朝鮮三国時代末期の百濟高句麗には、もはやどうしようもない、國運の衰退的な現象があらわれてきていたとすれば、おのずから時代の趨勢の赴くところは、直接に大唐でなくてはならない。隋唐との交渉は、推古天皇一五年(607)の小野妹子、鞍作福利の遣隋使以来、旧朝鮮關係に比べれば微々たるものではあるが、すでに意欲的に開かれていたのである。最も鋭敏な、触觉をもつとして最も移り気の多い新時代の形式感情が、隋唐船載の意匠に新様式への感覚をひらいていったとしても、決して不思議ではない。建築様式についても、大化改新のあった孝徳朝前後を境として、旧様式である四天王寺系建築が、ようやく凋落し衰退していったとしても、決して不思議ではないし、また新様式の抬頭が、最初かなり無秩序であったとしても、あえて怪しむに足りないのである。そして初唐様式の影響は、私たちが漠然と考えているよりも、もっと早

い速度で朝鮮直模の旧様式のなかに浸透してゆき、或いは交替を迫ったものと、私は考えている。それを、私は、天智、天武両朝における、政治的転換期の意欲的なエネルギーを反映して現れてくる法隆寺系建築にみるのである。

なお、この天智、天武両期において、こうした新様式が、はっきりした様相を示しえていたものとの推測を許す一つの例がある。それは、滋賀県大津市郊外における南滋賀癡寺址がそれである。もし、この癡寺址が、石田茂作博士の指摘なされるように(註四)、天智天皇七年(688)の創建と伝えられる近江崇福寺の癡寺址であるならば、この発掘伽藍址の示す、薬師寺式伽藍配置形式によって、法隆寺罹災の天智天皇九年(690)以前に、すでに、今日、薬師寺でみるごとき伽藍配置が行われていたことが判るのである。この薬師寺式は、天武天皇五年(677)の大官大寺、同じく、天武天皇八年(680)に発願される本薬師寺にみられる伽藍配置と軌を一にするものである。この癡寺址から発掘された出土瓦のなかに、単弁式蓮花文の軒丸瓦がかなりみられることにより推しても、この南滋賀癡寺址の創建を天智朝におくことには大きな誤りはないであろう。むしろ積極的に天智天皇六年における近江大津宮遷都との関連において、その創建を考えても差支いなのである。ともあれ、私は、この天智朝になつたとみなされる近江南滋賀癡寺址の薬師寺式伽藍配置に注目するのである。法隆寺金堂の起工とほぼ年代を前後するものと考えられる南滋賀癡寺が、このように、薬師寺伽藍

配置をとっているということは、薬師寺系建築にみる地円飛角種の移植年代を推定する上でも重要であり、ここに角種使用の上限年代も併せて考えられてくるのである。

すでに、私は、この小論のはじめにおいて、法隆寺金堂の完成年代を天武天皇八年(680)前後とみて、その着工年代を目的するに天武朝はじめを以てした。いま、また玉虫厨子の様式下限年代をみなすに、皇極天皇二年(642)より孝徳天皇四年(648)にわたる山田寺金堂の造管年代を以てしたのであるが、(厨子制作の実年代については、これ以上には触れない。丸種の反りと丸種の平行配列が今後に残された問題であるが、それをいかにみるかはにわかに判じ難いからである。)その間、様式年代の開きとしては、僅かに三〇年であるが、様式自身の開きは、決して看過されてよいほどさくはないように思われる。様式の変容といっても、要は屋根の反り、種のかたちに尽きるものではある。しかし、いつてみれば直線から曲線へ、円形から方形へというただそれだけの形式Formの変容のために、漢代から初唐への中国建築史が、どれほどの時間をかけてきたか、また、それを、たちまちのうちに承けてゆかねばならなかった、日本上代建築築史のおもわずにはいられないのである。究竟この小論はかつて玉虫厨子のまえに立った私が、どうしても玉虫厨子宮殿と、法隆寺金堂との屋根からうける形式感情が同じものと感じえなかつたその私の感覚に対する、一種の自己検証にほかなら

なかつたようである。

追記 (一)法隆寺の金堂建築を初唐様式の影響と目する私の見解に、或いは疑義を挟まれるむきもあらうかと思うが、この点については、稿を改めた上で、さらに論述したいと思うので、しばらく時をかして戴ければ幸いである。私は初唐様式と盛唐様式にかなりの相違を認める。初唐様式はいわば青春の様式である。そこには、未完成の協奏がある。即ち、斉周、隋の諸様式、時としては東西魏の様式など種々雑多に受け継いでいるように思えるのであるが、なお一種の調和感をそれにかけていたようである。そうした初唐様式の影響は、新羅統一を俟つまでもなく、直接に、わが邦に受容されていたものと、私は考えている。斑鳩宮址で発掘された唐草瓦は、そういう意味で大事な問題をふくんでいるものといえよう。

(二)、玉虫厨子と法隆寺金堂の建築細部の比較を、もっぱら屋蓋部にとどめ、屋根の形式と檼の形状とその配列にかぎったのは、この両者が、構造上密接な関係をもつからであった。またこの両者は建築美上、最も重要な形式 Form である屋根の流れ(縦断面)の反り、軒先きの反りを決定する要因となるのである。同じ軒廻り細部でありながら、あえて法隆寺系建築の所謂観せどころである雲斗雲肘木の様式に一切触れなかったのは、その構造上の問題に直接の関係がないからである。

また玉虫厨子も法隆寺金堂も、この雲斗雲肘木をもつとい

う点において、同系建築とみて差支えないではないかという疑義を、私に問う方も或いはないとは思われるのであるが、玉虫厨子の雲斗拱のもつ形式感情と法隆寺金堂のそれとでは明かな相違がある。私は、むしろこの相違を重視する。これまでの建築様式史では、法隆寺系建築における雲斗拱の源流を、漢代にまで遡上って求めてゆき、その関聯を重視してきたのであるが、少くともいままでのところでは、所謂漢代の空想形式とよばれる曲線の斗拱にしても、南北朝時代の諸例にしても、玉虫厨子や法隆寺金堂によく類似するものは、全く見当たらないといつてよい。時代様式、或いは地方様式の問題においては、ともすれば様式比較のため、相互の類似点のみをひき出し、その源流を索め、その系統を分類し合うことをもって終る場合が多いのであるが、私は、様式史において最も大事なことは、たとい源流を同じくし、系統を同じくしても、なおかつそこに生ずる相異点、異質感の解明にあると考えている。とくに芸術精神史の課題とするところは、そうした様式の変容 Metamorphose の背後を探ることにあるといつて差支えないと思う。

(三)、なお軒廻りの細部について、檼を支える玉虫厨子の丸桁が、円形の丸桁であるにも拘らず、法隆寺金堂においては、直角形の丸桁になっていることを、金堂における角檼の使用と併せて、指摘しておきたいと思う。関野貞博士は「我が寧楽時代の建物には多く円形の丸桁を用いしのみならず、支那、朝鮮の建物に今日に至るまで常に円形であるから、当

然支那、朝鮮に於ては無論円形の丸桁が行われていたのである。随つて飛鳥時代の建築にもあつたかも知れぬ。法隆寺堂塔などの我が直角形の丸桁は亦彼の輸入か若しくは特に我が國に於て發生せしものか不明なれども余は後者に賛成したい。」と述べていられる。

ここにおいても、すでに玉虫厨子の丸種と法隆寺金堂の角種との比較においてみてきたような、円形から方形へという重要な形式変容の問題が出てきたのである。私は、この丸桁の形式変容も、種とそれと相關的なものとして考えてゆくべきものと思う。ともあれ、この玉虫厨子の円形丸桁と、法隆寺金堂にみる方形丸桁との相異は両者の種の形状の相異ともに、優に、玉虫厨子をして、法隆寺系建築からわかつ有力な証拠となるのである。あえて追記する所以である。

(註一) 既出「日本書紀」四に拠れば、

まず飛鳥寺については、崇峻天皇元年(588)の条に(二一二頁)

「壞飛鳥衣縫祖葉之家始作法興寺。」

推古天皇元年(593)の条に(二二〇頁)

「以仏舍利置法興寺刹柱礎中丁巳建刹柱。」

推古天皇四年(596)の条に(二二三頁)

「冬十一月、法興寺造竟」とみえている。なお、四天王寺については、同じく推古天皇元年(588)の条に(二二二頁)

頁

「是歳、始造四天王寺於難波荒陵、」と記されている。

(註二) 既出「飛鳥寺の建築」七頁

(註三) 前出「飛鳥寺の建築」一八頁

(註四) 既出「法隆寺建築綜観」七〇頁

(註五) 上宮聖徳法王帝説裏書に、山田寺建立に關する年紀が記載されている。なお、本稿第一章にその引用がなされているので参照を乞う。

(註六) 既出「日本書紀」五一二頁

(註七) 浅野清「川原寺の発掘」(「仏教芸術」三八号 昭和三四、四、二〇) 六四頁

(註八) 石田茂作「近江崇福寺址考証」(既出「伽藍論攷」

九〇頁)

なお、近江崇福寺の天智七年創建年代のことは、日本書紀にはなく日本紀略の延喜二十一年の条に、「十一月四日曉崇福寺堂塔離舍等焼失、建立後二百五十三年」とあるにより逆算してこの年次である。

この崇福寺の癡寺址は、かつて梅原末治博士の主張なされたように、ひさしく同じく滋賀県の見世山中癡寺址に擬せられてきた。しかし、石田博士はこれを、延暦五年創建と伝えられる梵釈寺にあて考えられるのである。